
天才と色ボケと下克上

新夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才と色ボケと下克上

【Nコード】

N2836U

【作者名】

新夜

【あらすじ】

科学とオカルトの融合の末に誕生した試験召喚獣をカリキュラムに組み込んでいる文月学園――

今この地に、天才で俺様で傍若無人で厨二だけど根は優しいボクっ娘「ボクは男だ無礼者！」あべしい！

：男子が降り立つ！獅子の心を秘めたガンブレーダーに魔女の騎士を夢見るロマンチスト、史上最大のバカをも巻き込んだ笑いあり！漢のドラマあり！何よりリア充盛り沢山^{をい}の壮大な下克上ストーリー！が今、幕を開ける！

ブローグ ボクと姫と他多数（前書き）

注：ファイナルファンタジー8（パラレル）×バカとテストと召喚獣ですが、FF8側がパラレルなので今回はスコリノクロスオーバーではありません。主役もスコールでは無くオリ主です。

プロローグ ボクと姫と他多数

それは四月――

世間で言えば入学シーズンに当たるこの時期、ここ文月学園も例外では無く、校舎へと続く坂道の両脇に見事に咲き誇るソメイヨシノが、新入生を出迎えているみたいだ。
そして、戦乱へと足を踏み入れようとしているボク達をも――

「満開、といったところか」

「そうだねスコール！すつごく綺麗！」

「ほえー、こんな桜並木、故郷でも見たことあらへんわ」

「見事に咲き誇ってるねえ」

「こりゃさくらんぼの収穫が楽しみだぜ」

「ゼルさん、多分ならないと思いますよ…」

「ちえ、残念だなあ」

「ゼル、ニード、思考突飛」

「折角のローマンティックな気分を潰すなっつての」

「それにしても、ここ数日晴れ続きで良かったわ」

「そうねシュウ、まるで私たちを出迎えているみたいだわ」

「御天道様も空気読めるみたいで隅におけないもんよ」

と、俺たちが学園へと続く桜並木を歩いていると、

「おはようつてまた何時もの十二人構成か」

「「「「「おはようございます、西村先生」「「「「」

「お八ローございます！西村先生！」

「まみむめも！西村先生！」

「おはよーっす、鉄人」

「おはようさん、西村先生」

「おはようだもんよ、西村先生」

「御早、西村先生」

「デイン、俺は西村だ。それにカーウェイにティルミット、勝手に新しい挨拶言葉を作るな」

「まあ堅いこと言っとなつての」

「「そうですよ」」

「三人とも先生に馴々しいもんよ」

「イプシロン、後で良く言い聞かしてやれ。さて、ここにお前達十二人のクラスがそれぞれ書かれた封筒がある。渡すぞ」

と、西村先生が箱から封筒を取出し、十二人にそれぞれ手渡す。

「しかし何でまたこんな面倒臭い方法を取ってんだよ。普通に掲示板とかで張り出すとかしねえのかよ」

「は、物知りゼルが聞いて呆れるな」

「んだとコラ！」

「自分がFで知り合いがAなんて状況が起こったらどうなると思っ
てんだ？ハブリやらイジメやら起こる可能性無きにしもあらず、だ
ぞ」

「…まあアルマシーの例えは物騒だが、うちは世界的にも注目され
ているシステムを導入した試験校だからな。このやり方もその一環
ってわけだ」

ふーん、とゼル達数人が頷くと共に、封筒を開く十二人。

「それにしてもキニアスにティルミットにフェイオン、アルマシー

にイプシロンにパラメディックは残念だったな。おまえらならAクラスは確実だったのに」

「いやあ、緊張しいな部分が都合悪く出ちゃいましてね」

「アービンがぶっ倒れたんです。恋人として当然のことしたまでです」

「徹夜が原因で寝落ちしてしまうとは…」

「あー、調子悪くてな」

「サイファー同様」

「純粋な実力不足だもんよ」

そう、アーヴァインは緊張の余り嘔吐してドクターストップ、セルフィはそんな彼の付き添いのため試験放棄、シュウは寝不足が祟り、サイファーとフウは揃って体調不良で本来の力が出せず、ライは苦手な分野からの出題が多く、本来なら行けたであろうAクラスへの道を絶たれた訳だ。

それにより、

スコール、リノア、キステイス Aクラス

サイファー、フウ、ライ Bクラス

ゼル、シオン、ニード Dクラス

アーヴァイン、セルフィ、シュウ Fクラス

十二人の親友達は、見事にばらばらの道をたどることになった。

「ま、仕様が無えか！おいサイファー、試召戦争になったらてめえに殴り込むから覚悟しろよな！」

「はっ、上等だ！お前なんざ楽にノシて、スコール達Aクラスに乗り込む布石にしてやらあ！な、フウ！ライ！」

「無論」

「もちろんだもんよ！」

「全力で来るがいい」

「え、ちょ、いきなり宣戦布告は駄目だよ！」

「まあ、程々にね」

こうして、十二人は今後の学園生活に様々な思いを抱え、校舎へと入っていく。

そして遅れてもう一組…

「大丈夫か？姫香」

「うん…いい感じだよ…ゴメンね王牙君…用意に手伝わせちゃって…時間もかけちゃって」

「ボクが好きで行なっているだけだ。それに姫香に合わせないこの学校のタイムテーブルが悪い」

「随分とご挨拶だな紫宮。二人とも遅刻だ」

声のした方向へと顔を向けると、そこにはこの学園の生活指導教師が立っていた。

「おはようございます…西村先生」

「おはよう、かつて潜入のスペシャリストと呼ばれた鉄人よ」

「…紫宮、俺の中の人ネタがそんなに好きか？」

「何の話か？メタ発言は控えよ」

その生活指導教師——以下鉄人と「西村だ！いい加減覚えろ！」——地の文に突っ込む無礼者「呼ばせてもらう——は、小麦色に焼けた顔をしかめながら応対する。
この無礼者。

「それより、普通におはようございますじゃないだろ」

「お、遅れてすいません…」

「女の子の準備には時間が掛かることも知らぬ分際で、指導教師を名乗るとは笑わせる」

「紫宮は遅刻の謝罪より惚気が重要なのか？そして俺の中の人の台詞だ最後のは！」

とうとう額に手をあてて疲労を訴える鉄人。

この程度で生活指導が勤まるとはな…

「まあいい…それよりほら、受け取れ」

そういつて鉄人は箱から二枚の封筒を取り出すが、

「いらん。ボクも姫香もFクラスなのは目に見えている」

「いや、合ってはいるが一応受け取っておけ」

ふ、受け取っておくか。

「しかし災難だったな、二人とも性格はともかくテストを受ければAクラスは確定だったのに」

「いえ…体調管理が出来ない私の責任ですから…」

「ボクが好きでやったまでだ。それに上に立つ者は底辺を知らなくてはな」

「…少し性格改造されてこい」

鉄人が何か失礼なことを抜かしたようだが気にしたら負けだ。

「って、それよりもホームルームまで時間が少ないぞ！急げ！」

もうこんな時間か。

「では行ってくる。あ、そうだ鉄人」

「……いい加減名前を覚えろ、俺は西村だ」

「では教師西村、よくボク達の歩む道をみていると良い。ボクと姫香と我が側近達の、」

そして天を指し、こう言い放ってやった。

「下克上の道を！」

こうして、ボク達の新しい日常は始まった。

プロローグ ボクと姫と他多数（後書き）

初めましてな方は初めまして、スコリノクロスオーバーで知っているという方はこんばんわ。新夜です。

…また懲りずにFF8で新小説です。しかも今回はスコールは主人公ではありません。メインキャラにはなりますが。

ちなみに作中に登場したシオンですが、FF8に登場した三つ編みの図書委員の子です。

ネーミングの由来はメルブル（殴

また原作では名字の無かったキャラクター達には勝手に付けさせてもらいました（笑

各キャラの名字等は次に掲載しますキャラ紹介にて。

次回から前書きにバカテストを掲載する予定です。尚掲載問題はアニメをベースに、現実的にアレ？と思った部分を修正しております。

オリジナル&FF8キャラ紹介（前書き）

問

調理の時に火をかける鍋を製造する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい。

アーヴァイン・キニアス、紫宮王牙、セルフィ・ティルミット、姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金例…ステンレス』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、皆さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

シユウ・フェイオンの答え

『合金例…アルマイト』

紅月姫香の答え

『合金例…トタン』

教師のコメント

それはメッキ（被膜）です。

吉井明久の答え

『合金例：未来合金（凄く強い）』

教師のコメント

凄く強いと言われても。

オリジナル&FF8キャラ紹介

Fクラス

○紫宮 王牙しのみや おうが

CVイメージ：伊藤静

身長：173cm

体重：52kg

3サイズ（笑）：B85（A）/W60/H80

得意科目：全て（500点台中盤）

召喚獣：白く無地のワイシャツに黒いフォーマルスーツの上下を身に纏い、額には『崇めよ！このボクを！』と書かれた鉢巻（端に、Fクラスを示す刺繍）、武器は刀（居合）（近距離型）。

性格：冷静沈着で大抵の事には動じず、「王の証たる紫の牙」と公言して憚らない俺様で厨二であるものの、人を思いやる気持ちはあり、偉そうながらも世話を焼く。

だが姫香の事になると口調こそ変わらないが徹底して色ボケに走る。一人称は「ボク」。

備考：主人公。

『学園始まって以来の神才』の異名を持つものの、クラス分けテストの日に姫香が体調を崩しその看病のため参加出来ずFクラスに振り分けられるが、本人は「下克上だ」とむしろ好意的に受け入れている。

れっきとした男で、体格も引き締まっているが、確実に女と間違える程の綺麗な顔立ち（月姫のアルトルージュに酷似）に、何故かあるAカップのバスト等から『第四の性別『王牙』』に認定される（区分けは『秀吉』はどちらか分からない、『王牙』はどちらもある）が本人にそう言うとはブチキれる。

そのため男女問わず人気は頭抜けているが本人は姫香一筋。

見かけに似合わず秀吉を凌駕する強靱な内臓の持ち主（瑞希の料理（化学兵器）を食べても倒れずにそのまま感想が言える）。

いづみ
○紅月 姫香 ひめか

CVイメージ：門脇舞以

身長：158cm

体重：43kg

3サイズ：B80（F）/W50/H70

得意科目：日本史・世界史・現代社会（600点オーバー）

苦手科目：数学・物理・化学・保健体育（100点を超える程度）

これ以外の科目は400点前後。

召喚獣：純白のロングドレスにFクラスを示す刺繍が施された薄紅色のチョーカーを付け、頭には白薔薇の髪飾り、武器は杖（リリカルなのはシリーズで八神はやてが使うシュベルトクロイツを銀色にした物）（万能型）。

性格：根は素直だが対人恐怖症で、人前に出るとオドオドしてしまう。そんな自分を嫌悪しており変えようと志しているが、いざと言うときに恐怖に負けてしまう。

王牙が関わると少しは改善され、また彼には普段からは想像もつかない程色ボケた（というより病んだ）接し方をする。

備考：ヒロイン。

社会科学系科目だけでなく暗記系の問題を得意とすることから『雑学の書庫』の異名を持つが、虚弱体質且つプレッシャーの影響を受けやすい性格からクラス分けテストの日に体調を崩して参加出来ず、Fクラスに振り分けられる。

巻き込まれる形で同じクラスとなった王牙に対して申し訳ない気持ちで一杯だったが、むしろ甘受していた彼に救われる。

宇宙一の美女と呼び声高い美貌（月姫のアルクエイドが髪を長く黒にした感じ）と、均整のとれたスタイルから男子の人氣が圧倒的に

高いものの本人は王牙一筋。

○アーヴァイン・キニアス

得意科目：数学・化学・物理（500点前後）

これ以外の科目は300点台序盤

召喚獣：原作と同じ格好（遠距離型）

備考：王牙達のクラスメイトで、スコール達とは中学からの仲。

セルフイとは恋人同士で、「セフィ」と愛称で呼んでいる。

クラス分けテストの際に緊張の余り嘔吐してドクターストップがかかり、途中離脱となりFクラスに振り分けられることに。

本人はこの件でセルフイを巻き込んだ事を気にしている。

○セルフイ・テイルミット

CV：青木まゆこ

得意科目：数学・英語（500点台中盤）

これ以外の科目は300点台前半

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：王牙達のクラスメイトで、スコール達とは中学からの仲。

アーヴァインとは恋人同士で、「アービン」と愛称で呼んでいる。

クラス分けテストで嘔吐したアーヴァインの付き添いのため途中放棄、Fクラスに振り分けられることになったが、本人は「恋人として当然」と気にしていない。

○シュウ・フエイオン

得意科目：全て（400点前後）

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

腕輪：ブラッドペイン

20点を消費することに『2%のフィードバック』『必殺判定』の

効果が付加された苦無を生成出来るようになる。

備考：王牙達のクラスメイトで、スコール達とは中学からの仲。
徹夜で試験勉強していたのが災いし、クラス分けテストで見事に寝落ち、Fクラスに振り分けられることに。

Dクラス

○ゼル・デイン

得意科目：保健体育（600点近く）

苦手科目：英語（一桁）

これ以外の科目は100点台前半

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

腕輪：デュエル

1点を残して全て消費し、敵一体に連続で技を繰り出していく。
攻撃に触れた相手はしばらく動けず、その際に発せられる衝撃波に触れても大ダメージを負う。

備考：Dクラス代表。

スコール達とは中学からの仲で、同じクラスのシオンとは恋人同士。

○シオン・アトラティカ

得意科目：国語・古文（500点近く）

これ以外の科目は100点前後

召喚獣：原作と同じ格好、武器はA4サイズのハードカバーの本（遠距離型）

腕輪：冷徹なる一撃

120点を消費して、フィールド全体に絶対零度の氷塊を降らせる。

備考：ゼルの恋人。

スコール達とは中学からの仲だが彼女だけ仲間内でも敬語。

○ニード・レスファ

得意科目：物理（400点オーバー）

これ以外の科目は100点台前盤

召喚獣：原作と同じ格好、武器はFN P90（遠距離型）

腕輪：デスペラード

150点を消費して空中へ飛び上がり、フィールド上の敵全員に銃撃を浴びせ、着地した瞬間に全体爆発。

備考：ゼル達のクラスメイト。

スコール達とは中学からの仲。

Bクラス

○サイファー・アルマシー

CV：子安武人

得意科目：国語・現代社会（500点台前半）

これ以外の科目は300点オーバー

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：Bクラスの代表。

スコール達とは中学からの仲で、同じクラスのフウとは恋人同士。

高熱をおしてクラス分けテストを受けるも本来の実力を発揮出来ず、Aクラス入りを逃す。

○フウ・パラメディック

CV：夏樹リオ

得意科目：古文・日本史・世界史（500点近く）

これ以外の科目は300点台序盤

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：サイファアの恋人。

スコール達とは中学からの仲。

固有名詞以外は全て漢字で表記出来る独特の喋り方をする。

テスト前日まで徹夜でサイファアの看病をしていた為か自らも疲労等で体調が思わしくなく、結果Aクラス入りを逃す。

○ライ・イブシロン

CV：中井和哉

得意科目：数学以外（400点前後）

苦手科目：数学（100点超える程度）

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：サイファア達のクラスメイト。

スコール達とは中学からの仲。

「もんよ」が口癖。

クラス分けテストで出題された問題が、本人曰く「苦手な分野からのが多過ぎたもんよ」らしく、Aクラス入りを逃す。

Aクラス

○スコール・レオンハート

CV：石川英郎

得意科目：全て（500点オーバー）

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：一学年時に王牙と並んで評された『学園始まって以来の天才』。

サイファア達とは中学からの仲で、同じクラスのリノアとは恋人同士。

過剰に目立つのを嫌って、クラス分けテストでは「手加減した」らしく、代表の座を翔子に譲る。

○リノア・カーウェイ

得意科目：国語・古文・英語・日本史・世界史（600点近く）

苦手科目：化学・物理（100点すら怪しい）

これ以外の科目は400点台序盤

召喚獣：原作と同じ格好（万能型）

備考：スコールの恋人。

彼らとは中学からの仲。

○キステイス・トゥリーブ

得意科目：化学（500点台後半）

これ以外は400点台後半

召喚獣：原作と同じ格好（近距離型）

備考：スコール達のクラスメイト。

彼らとは中学からの仲。

彼女もまた振り分け試験の際に手加減したが、本人曰く「前線の方が楽に戦える」とのこと。

一章　ボクとお供と自己紹介（前書き）

注：今回のバカテストはオリジナル問題です。

問

以下の元素記号を、原子番号順に並べかえた上で正式名称を答えて下さい。

H I Mg Ca Al Si Te Ir

アーヴァイン・キニアスの答え

H…水素

Mg…マグネシウム

Al…アルミニウム

Si…ケイ素

Ca…カルシウム

Te…テルル

I…ヨウ素

Ir…イリジウム

教師のコメント

正解です。テルルまで解答するとは流石キニアス君ですね。ちなみにテルルの名前の由来は地球を意味する『テラ』だそうです。

姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

H…水素

Mg…マグネシウム

Al…アルミニウム

Si…ケイ素

Ca…カルシウム

Te…テクネチウム

I ∴ ヨウ素

I r ∴ イリジウム

教師のコメント

やはりテルルは難しかったでしょうか？

セルフィ・テイルミットの答え

H ∴ 水素

M g ∴ マグネシウム

A l ∴ アルミニウム

S i ∴ ケイ素

C a ∴ カルシウム

T e ∴ (アービンと同じ答えで)

I ∴ ヨウ素

I r ∴ イリジウム

教師のコメント

キニアス君は正解しましたが丸投げは認めません。

紫宮王牙の答え

『 姫香愛している 』

教師のコメント

惚気ないで下さい。

紅月姫香の答え

『 王牙きゅん / / 』

教師のコメント

紫宮君は貴方の想像通りの回答をしましたが、別に彼がこの問題を作ったわけではありません。

一章 ボクとお供と自己紹介

旧校舎 2年Fクラス教室前

「ここがFクラスか。」

「そ、そうみたいだね…（汗）」

「この教室設備はクラスごとに大きく差が付けられているとは聞いていたが、まさかこれ程までとはな。ここまでボロくするののもご苦労なことだな」

ボク達の目前に映るFクラスの教室――
はつきりと言おう。

こ れ は ひ ど い

窓越しでも蜘蛛の巣が見え、和室をイメージして敷かれた畳はボロボロ、机代わりらしい卓袱台は足が折れており、椅子代わりの座布団は中の綿がすっかりカチカチになって正に『煎餅布団』だ。
というか何故『旧』校舎がある…ここ創立何年だ？

…しかし、悪くないな。

「正に底辺にふさわしい…ここからAクラスの最高級設備…頂点へと押し上がる…まさしく下克上という言葉が似合う」

「お…王牙君格好いい…けほっ！けほっ！」

「！大丈夫か姫香！？」

「うん…ちよつとむせた…」

多分、むせた原因はここにあるう。

ここまでボロボロな建造物だ、黴だって大分繁殖しているだろう。

身体の弱い姫香では数日と経たずに体調を崩してしまうに違いない。
なるべく早く、成し遂げなければな…

「では、入るか」

「うん」

ガッ！（扉の把手に手を掛けた音）

バアアアン！（勢い良く開けた結果、扉が壁に叩きつけられた音）

「入るぞ！「遅いぞ蛆m」」

ズドオオオオン！（王牙の正拳突きが鳩尾に直撃）

「ひでぶうううう！？」

今、こいつ何と言った……？

「立て、貴様」

「ぐあ……てめえ何しやがってお前まさか紫宮！？」

「如何にも…『王の証たる紫の牙』とはこのボクの事」

『ええええええええ！あの紫宮あああああああ！？』

教室中を畏敬らしき絶叫が響く。

普段は心地よかったこの大音量だが、

「つと、そんな事はどうでも良い！貴様！姫香に何と抜かした！？」
「いや…あれはバカ久が来たと思ってっ」

「皆の者！こいつは虫けらの分際で姫香を蛆虫だと抜かしたぞ！この無礼を許せるか！？」

『許せる訳無えだろおおおおお！』

「な、何をする貴様らあああああ！？」

ビシバコドガゲシッ！（フルボッコ）

教卓に立っていた虫けらはものの見事に黒装束の集団にフルボッコにされた…いい気味だ。

ちなみにその虫けらの名は坂本雄二。
何でもFクラス代表らしい。

その後に福原と名乗ったFクラスの担任教師が来たことでフルボッコは終息、各自自己紹介することとなった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

最初に自己紹介を行なった木下と名乗るクラスメートをみた時、何か妙なシンパシーを感じた。
そしてその要因は直ぐにわかった。

「一先ず言っておくが、ワシは男じゃ。女と間違えぬよう頼むぞい」

…と言っていたが、明らかに女性だ…顔等色々。

ボクも確実に女性と間違われる見た目（間違えた虫けらは血祭りにしてやったが）故に感じたのだろう。

こいつとは、中々うまくやれそうだ。

「以上じゃ。これからもよしなに頼むぞい」

と考えていたらいつの間にか木下の自己紹介が終わった。
続いて、

「…土屋康太」

早っ！

土屋と名乗る小柄な眼鏡は自らの名を名乗っただけで着席をした。
随分と無礼な。

…む、そういえば聞いたことある名だな。

確か一年の時の保健体育のテストでボクに迫る点を叩きだしたよう
な…

まあよい、さて気を取り直して、

「まみむめも！」

すてーん（クラス全員が座っているのにずっこける音）

「ちょ！？何でずっこけるん！？腹立つなあ」

「そこは『ムカツキイ！』と言うところだろう、スピラの大召喚士
よ」

「そこ！中の人ネタやめい！」

「メタ発言は控える無礼者」

「あんたの方がよっぽど無礼や！」

全く、素っ頓狂な挨拶をした分際でノリがイマイチだ…。

「コホン、紹介が遅れたわ。セルフイ・ティルミットや。皆、よろしゅう！」

ティルミットと名乗ったその生徒、ここでは珍しい女子だ。

ただまわりの反応は微妙に騒ついている程度で、表だった騒ぎ方ではない。

それはそうか、あの挨拶だしな。

「言つとくけど彼氏おるんで告らんといて」

『な、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!』

訂正するか。

…む、待てよ…ティルミット…もしや？

「こんにちは。アーヴァイン・キニアスです」

そう思考に耽つていたボクを余所に自己紹介は続くが…待て、今こいつキニアスと名乗らなかつたか？

ざわ…ざわ…

案の定と言つべきか、ボクの今の気分を代弁しているかのように辺りが某賭博漫画みたく騒つく。

「あ、ちなみにさつきセフィが言っていた彼氏というのは僕『殺せえええええ!』…やれやれ」

…だがその騒つきは奴がティルミットとの関係をカミングアウトしたことで吹っ飛び、先程坂本をノシた黒装束の奴らが立ち上がったかと思えば一瞬遅れてキニアスに殺到するカッターナイフ…って、

こちらにも飛んできたぞ！？

ヒュン！（カッターナイフが飛びかう音）

ドン！（アーヴァインの畳返し）

ドスドス！（畳にカッターが刺さる音）

『異端者には死を』調子に乗るとフレイムショットだから「ひい！」

尚も追撃を試みる黒装束共だが、キニアスの脅しとその際に見せた、獲物を狩る鷹みたいな目付きに恐れをなした。

間違いない、あの『^{ライブラスコープ}論理派狙撃手』だ。

そしてテイルミットもあの『^{ベルソナル}電波式演算者』で相違ないであろう。しかしAクラスに確実に入れるだろう二人が何故ここに…？

いや、二人は付き合っていると今し方カミングアウトしたのだし、ボク達みたいに片方が体調を崩し、もう片方が看病していた、きつとそうであろう。

「シュウ・フェイオンです」

『うおおおおおおお！』

『え！あの『万才の麗人』のフェイオンさん！？』

キニアスの次に、一人の女子が自己紹介を始めると、男子から謎の喝采、女子から先のキニアスの時と同じような騒つきで教室が包まれる。

だが…『万才の麗人』？聞いたこと無いな。

この騒つき振りからしてキニアスやテイルミットと同じような実力はある、ということだろうが…

その後も自己紹介は続いたが、木下やキニアス、テイルミットのよ

うにボクの興味を引く輩は見当たらなかった。

中には何処かのファルシを統べる者を「ちよ、また中の人ネタ!？」

「駆け出しの海賊風情が地の文に突っ込むな!」殴るのが趣味だと抜かす奴がいたが、さして気にならなかった。

つと、ボクの番か。

「先程も紹介があつたが、紫宮王牙だ『うおおおおおお!』言つておくがボクは男だ『男の娘萌ええええ!』」「じゃあその胸は何!？」す、全て奪い尽くしてやろうか!？」

気色悪い男共の歓声（黄色い、と表現可）と一部女子の突っ込みに悪寒がした…胸の事をつ込まれてもボクは知らん!いつの間にか成長したのだ!

「と、ともかく…皆の者、宜しく頼むぞ」

さてボクの次は……姫香か。

ボクでああなのだ、彼女の場合は体調を崩しかねないな。

「（姫香、体調が思わしくなかったら切り上げていいのだぞ）」

「（うん…ありがとね、王牙君）」

「（気にしなくても良い）」

「こ、紅月姫香…です『うおおおおおお!』ひやわっ!?!『萌えええええええ!』ふええ!?!」

「貴様らにあらはじめ言つておくが、姫香はボクと恋仲なので告白しても無駄『（ぐさあっ）グ…パー!』だぞ…と言つまでも無かつたか」

ボクがカミングアウトしてやった後には意気消沈する男子共。

「（ありがとう…王牙君）」

「（気にするな。恋人のピンチを救うのに理由はいらない）」

「（あと…凄い格好良かったよ（照）」

「（姫香…（照）」

トントン

「すいませんが後がつかえていますので惣気はそこまでに^{バキッ}あ、すいません替えを取ってきます」

いい雰囲気だったのに教師福原のKY指導に少しイラッとしたが、注意のために教卓が割れてしまい取りに行ったのでやめた。

軽く叩くだけで教卓まで割れるとはどこまで設備が落ちぶれているのだ…

まあ、良いか。

「姫香…」

「王牙きゅん…」

邪魔者もいなくなった（あの黒装束共は何故かボクに齒向かってこない。好ましいが、女だと思われるみたいで複雑だな…）のでいちゃつかせてもらおうが、

ガラガラガラ！

「あの…遅れて…すみま…せん…」

まだ来ていなかったであろう一人の生徒が入室のために開けたドアの音に阻まれる。

「うち、良いところだったのに……って、あいつは……」

「姫路……か？」

「え……姫路さん……？」

その入ってきた生徒は、学年でも五指（うち一つは無論ボクだ）に入ると言われた存在、姫路瑞希。

二章 姫路と恋愛相談と所信表明（前書き）

今回のバカテストもオリジナル問題です。

（…いつその事今後もありジナル問題で行こうかな…）

問

素数分布の規則性に着目し、未だに証明されていない仮説の名前を何と言うでしょう。

アーヴァイン・キニアス、紫宮王牙、島田美波、セルフィ・ティルミット、姫路瑞希の答え

『リーマン予想』

教師のコメント

正解です。ちなみにグレイ数学研究所はこの証明に百万ドルの懸賞金を掛けています。それにしても島田さんまで正解とは驚きです。故郷の偉人だからでしょうか？

紅月姫香、シュウ・フェイオンの答え

『リーマン定数』

教師のコメント

不正解です。ちなみに作者もWikiで調べた際に同じ間違いをし、結果ヒットしなかったそうです。

土屋康太の答え

『リーマン・シヨック』

教師のコメント

また日本を不景気にする気ですか。

二章 姫路と恋愛相談と所信表明

「丁度良かった。今自己紹介をしている所なのでお願いします」

「はい、姫路瑞希と言います。宜しく願いします」

教卓を抱えて戻った教師福原に促され、姫路が簡単な自己紹介をする。

…まさか姫路までがこのFクラスに来るとはな。

「はい。質問です！姫路さんだけでなく、ティルミットさんにキニアス君、フエイオンさんに紅月さん、そして紫宮さ「ボクは男だと言っているだろう！」く、君は何故ここにいるんですか？」

ボクのそんな心情を代弁するかのように、一人の男子が質問する。
正直無礼極まりなかったが、ボクも姫路達がここにいる訳を知りたかったので特に気にする事無く、

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

「最初から出られなかったけど…高熱なのは姫路さんと一緒…かな

…」

「その姫香を看病していた『百合萌えええええ！』だ、誰が百合だ！？」

「寝落ちしたわ…orz」

「いやあ、試験中に吐いたことで摘み出されちゃってね…」

「そのアービンの付き添いで試験放棄したんや『キニアスを殺s』『フレ임シヨットw』『グ、ズ、ギヤアアアアアアム！』」

質問に答えてやった。

その際ボクと姫香の関係を百合だと抜かす無礼があったり、

キニアスとテイルミットの熱愛に嫉妬した黒装束共が飛び掛かろうとして逆にキニアスに焼かれたりとハプニング続出だった。
いいぞキニアスもつとやれ。
すると、

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったなあ」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘を有難う」

等とバレバレな言い訳が吹き上がった。

流石はFクラス、笑えるバカ話だ。

「き、緊張しました…」

「あのさ姫「姫路」」

空いている席に向かった姫路に、吉井と坂本が声を掛ける（坂本が割り込んだ形なので吉井の方は、姫路は気付いてないみたいだが）。

「は、はい。何ですか？えつと…」

「坂本だ。坂本雄二だ。宜しく頼む」

「姫路です。宜しく願います」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「ボクも気になるな」

「よ、吉井君に紫宮さ「何度間違えたら気が済むんだ！」君!？」

「姫路、吉井が不細工なのと紫宮が短気ですまん」

「坂本、お前さっきの襲撃で右脳に重大な損傷でも負ったか…？」

「何だその生暖かい目は！？というかその襲撃はお前が煽ったんだろっが！」

吉井は単刀直入に言えば『美男子』という言葉が合う。

それを不細工だと言い放つとは坂本の美的感覚を疑わなくては。

そんなボクの指摘を「生暖かい目」の一言で切り捨てるとは無礼な。

「紫宮君、何かあったんですか？」

「ああ実はな、教室に入った途端、姫香がこの坂本に蛆虫と罵られたので皆がブチキレたのだ。挙げ句、後で話を聞くと吉井が来たものだと無礼過ぎる間違いをしたらしい」

「坂本君…？」

「ひ、姫路！？何だその難見沢症候群患者のようなオーラは！？」

「姫香ちゃんにひどい事言っただけならまだしも…吉井君にも同じ事言う予定だったなんて許さない…」

と、そんな風に姫路達と話していると、

トントン

「はいはい、その人達静かに「バキイイツ！」えー…もう一回替えを取ってきますので少し待ってて下さい」

「あ、あはは…」

教師福原が教卓を軽く叩きながら注意するも、教卓が再びお釈迦になり、再び替えを取ってくることに…

その様子に姫路が苦笑いを浮かべていた。

他の面々は二回目ということで落ち着いていたが。

「…雄二、ちよつといい？」

「ん、何だ？」

「ここじゃ話にくいから廊下で」

「別に構わんが」

と、教師福原が去ったところで吉井が坂本を廊下に連れ去っていた。何の用件か気になったが、後で話しそうな感じがした為あえて追わなかった。

それに、それよりも、

「姫路、さつきから吉井の方ばかり目が向いているみたいだが」

「ふ、ふえ！？」

姫路の様子が気になったからな。
しかし分かりやすい反応だ。

「好きなのか？吉井の事が」

「へ！？あ、あの、いや、そういう訳では…」

「さつきも姫路さん…吉井君が蛆虫だと罵られたと知って…物凄
い怒ってたからね」

「姫香も分かるか」

「それは分かるよ…王牙君と何時も…一緒なんだもん」

「姫香…」

「私も吉井君と、紫宮君と紅月さんみたいな関係になりたいです…」
「今さらつと吉井君が…運命の人だって認めたね」

「きゃ！？」

本当に分かりやすい。

「安心しろ。ボク達がその恋、成就させてやるう」

「…へ？」

「私達と姫路さんの…仲だよ」

「は、はい！有難うございます！」

「礼なら成就してからでいい」

「はい！頑張ります！」

ボク達の応援に、決意を固める姫路。

普段だったらこうも気に掛けるような事は無いのだが、姫路の恋愛相談となれば話は別だ。

普段、話が弾みそうな奴としか話す気になれないボクと、そもそも対人恐怖症でボク以外とはまともに話せない姫香。

姫路は、その数少ない『話が弾みそうな奴』の一人（他の奴は皆Aクラスに行つてしまつたらしいが）で、姫香も（ボク同伴で）話しているうちに打ち解けるようになった。

要はボク達二人と姫路は『親友』であり、その親友の恋愛とあらば応援しない訳には行かない。

まあ、吉井の方も姫路の事が好き（つまり両想い）である事を知るのは直ぐだった訳だが。

ガラガラ

姫路の恋愛相談をしていた所へ坂本と、件の吉井が戻り、少し遅れて教師福原が三つ目の教卓を抱えて戻ってきた。

「坂本君、君が最後の一人ですよ。クラス代表でしたよね？前に来てください」

「了解」

教師福原に促されて壇上に上がった坂本は、

「Fクラス代表の坂本雄二だ。皆に一つ聞きたい… Aクラスは冷暖房完備の上に、座席はリクライニングシートらしいが… 不満はなにか？」

開口一番、そう問い掛けてきた。

そして、その問いにクラスの面々は、

『大ありじゃあああああああああああ！』

文字通り、心一つに不満をぶちまけた。

「だろう？ 俺だってこの現状には大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差がありすぎる！』

坂本の同調するような言葉に、クラスの思いは一つに纏められていく。

こいつ… 第一印象はこれ程無礼な奴はいないという感じだったが、中々のカリスマ性を持っているではないか。伊達に代表はやっていない、という訳か。

「皆の意見は最もだ。そこで提案だが、」

そして、坂本は一呼吸置き、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

そう言い放った。

ふっ面白い。

まさかボクと同じような野望を持っていたとはな。

恐らく、吉井との話もそれだろうか？

だとしたら吉井もまた同じ野望を抱えている、ということだ。

ボクの下克上も、これで面白くなりそうだ。

三章 切り札と決起と死地へGO！（前書き）

問

一般的に半金属に分類される元素を全て答えなさい

アーヴァイン・キニアス、紫宮王牙の答え

B…ホウ素

Si…ケイ素

Ge…ゲルマニウム

As…ヒ素

Sb…アンチモン

Te…テルル

Po…ポロニウム

教師のコメント

正解です。二人とも流石ですね。

セルフイ・テイルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

B…ホウ素

C…炭素

Si…ケイ素

Ge…ゲルマニウム

As…ヒ素

Sb…アンチモン

Te…テルル

Bi…ビスマス

Po…ポロニウム

教師のコメント

書き過ぎです。

紅月姫香、坂本雄二の答え

S i :: ケイ素

G e :: ゲルマニウム

教師のコメント

メジャーな部分しか分かりませんでしたか…。

三章 切り札と決起と死地へGO！

ただ周囲の反応は、

「勝てる訳がない」

「これ以上設備を落とされたくない」

「姫路さんがいれば何もいらない」

「フェイオンさんがいてくれるだけで十分だ」

「それよりキニアスをノシてティルミットさんに告白したい」

「あのレスカップルの間キボンヌ」

冷やかかであった。流石に一見夢物語のような話を信じる程バカというわけでは無いようだ…って誰がレスだ！

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな雰囲気でも坂本は自信満々に言い放つ。

ふふっ見せてもらうぞ、お前が如何にこの状況を打開し、クラスを纏め上げていくかを。

「何を馬鹿な事を」

「出来るわけ無いだろう」

「何を根拠にそんな事を」

尚も上がる冷めた声。

だがボクは知っている、これが不可能では無いと。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことの出来る要素が揃っている。今からそれを証明してやる…おい康太、畳に

顔を付けて姫路と紅月のスカートと紫宮のワイシャツの隙間を覗いてないで前に来い」

「……！（ブンブン）」

「は、はわ！？」

「ひゃう！？」

「っ！？」

迂闊だった。

坂本に指摘されて下を向くとそこには顔に付いたであろう畳の跡を手で隠しながら首を振りつつ前へ向かう土屋の姿。

そうだ思い出した。

こいつ、土屋康太は保健体育だけでなくボクといい勝負が出来る点数を叩きだす奴だ。

そしてまたの名を、

「土屋康太。こいつがあ有名な『寡黙なる性識者』だ」

「……！（ブンブン）」

『寡黙なる性識者』
ムツリーニ

男子生徒からは畏怖と畏敬、女子生徒からは軽蔑を持ってそう呼ばれる、文月学園の生ける伝説。

だがその正体が土屋だというのは意外と知られていない（ボクはその保健体育の成績に目を付けたのが切っ掛けで既に知っていたが）。その証拠に、

「ムツリーニだと……？」

「馬鹿な、奴がそうだと言っのか？」

「だが見る、あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしている……」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ…」

如何にも初めて知りましただと言いたげな声が響き渡る。

そんな中姫路は頭に？マークを多数浮かべていた…ムツツリの意味が分からないか、ウブな奴だ。

「姫路さん…ムツツリって…ムツツリスケベって…意味だよ」

「ふえ！？」

「ボクには最も相応しくない称号だ」

隠れてコソコソとは正に虫けらの所業ではないか。

男たるもの、オープンであることが肝要なのに。

「姫路にテイルミット、キニアスにフェイオン、紫宮に紅月の事は説明するまでも無いだろう。皆だって、その実力は知っている筈だ」

「えっ、私ですか？」

「ん？僕かい？」

「ウチ？何か照れるわ」

「私？」

「頑張ろうかな…」

「ふふっ、ボクか」

「ああ、うちの主戦力達だ。期待している」

ボクは当然の事、姫路は総合で五指に入る実力の持ち主、キニアスは数学と物理と化学、テイルミットは数学と英語でボクに迫る実力、姫香の日本史と世界史と現代社会はボクすら凌駕する程だ。フェイオンは…知らん。

「そっだ、俺達にはあの六人がいるんだった」

「彼女達ならAクラスにも引けをとらない」

「姫路さんさえいれば何もいらぬ」

「ティルミットさん、キニアス何か放っておいて俺と「シメるよ？」
すいませんでしたあ！」

「フエイオンさん綺麗です」

「紅月さんと紫宮さんに挟まれたい」

「後の方は関係ないだろう！それにいい加減、ボクは男だと認識しろ！」

全く無礼極まりないな。

「それに木下秀吉だっている」

「む？ワシか？」

「演劇部のホープか！」

「ああ。確かあいつの双子の姉が…」

「Aクラスの木下優子だっけ？」

木下優子？誰だ？

「当然、俺も全力を尽くす」

あそこまで言い放ったのだ、代表なのだし、当然であろう。
坂本の實力はともかくとして。

「おお、何かやってくれそうだ」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんやキニアス、紅月さんと
同じく体調不良だった訳か」

「實力はAクラスレベルが七人もいるって事だよな！」

「正に七英雄、じゃなかった、七人の侍だな！」
「ネタ古っ！」

見事だな坂本。

最初は冷ややかだったクラスの空気は時を経ることに熱気を上げ、最高潮といって差し支えない。
だが、

「それに吉井明久だっている」

その一言がその熱気を下げたのをボクが感じ取ったのと、一瞬にして坂本の前に立ち首根っ子を掴んだのは同時だった。

「貴様、折角の熱気に水を差して、どうなるか分かっているだろうな？」

「いやいや待て待てこれは明久の知名度のせいであって紫宮、お前の髪が赤く染まつてるのは俺の見間違いか！？」

「一先ず何故吉井の名を出したか弁明を聞こうか」

「えーとだ、あいつの肩書きは『観察処分者』だ」

「全て奪い尽くされるか魂まで奪い尽くされるか存在そのものを奪い尽くされるかどれか選べ」

「全部一緒だし中の人ネタかよとか色々突っ込みたいがとにかく誰かボスク」

『殺っちゃえ（笑）』

「失せろ！」

ヒュゴォッ！

「ぬわーーーーー！」

「さて坂本を肅正した所でボクが代打を務めるが、吉井は『観察処分者』らしい」

「それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

観察処分者。

文月学園の制度に一応はある、『どうしようも無い生徒』に下される称号。

『どうしようも無い』には色々と基準があるらしいが、今まで適用例が一件だけだったらしい。

それがまさか吉井だったとはな（笑

「ち、違うよ！ちよっとお茶目な十六歳に付けられる愛称で」

「ならばX二乗マイナス9イコール0でXに入る数を答えろ」

「4・5！」

どんがらがっしやああああああん！

「と、見てのとおり吉井の場合はバカ故に下された訳だ」

「え！違うの！？」

「で、その役割は主に教師の雑用係で、力仕事を行なう都合上特例で試験召喚獣が物理的に干渉出来るようになってる。代わりに召喚獣が食らったダメージの数%を自分も食らうハンデ付きだが」

「おいおい、それって試験召喚戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。おいそれと召喚出来ない奴が一人いるってことになるよな」

「ふふっ分からないか？雑用の為に召喚獣をやたらと使う事のメリ

ツトが」

「メリット？あんのかよ？」

やはりここら辺はFクラス、という訳か。
と思いきや、

「ああ、成る程ね」

「ウチもわかったわ」

「へえ、そういうことね」

「私も分かりました」

「王牙君、分かったよ」

流石にこの五人は分かったか。

「よし。ならばキニアス、代表して答える」

「僕達は召喚獣を操る機会が少ないからはつきり言って大雑把な動きしか出来ない。だけど吉井君の場合はその機会が他の同級生より遥かに多く、故に扱いに長けている…これでいいかい？」

「満点だ。つまり他の面々がFateシリーズの衛宮士郎、吉井がバゼット・フラガ・マクレミッツみたいなものだと考えればいい」

「確か某サイトの見解じゃあ、士郎は第五次聖杯戦争の時点で例え無限の剣製が使えたとしてもバゼットには勝てない、とか言ってたよな？」

「凄えじゃん吉井！これでAクラスに対抗出来る奴が八人もいるってことだよな！」

「いやあ、そうでも無いよ」

吉井の有用性が判明し、クラスのボルテージは最高潮に達した。
ここが決起の時だな。

「皆の者、現状は大いに不満であらう？」

『当然だ！』

「ならば武器を取れ！出陣の準備だ！」

『おおー！ー！ー！』

「ボク達Fクラスに必要な物は？」

『Aクラスの設備！』

「ボク達が成し遂げるべき事は？」

『下克上！』

「皆の物崇めよ！このボクを！」

『王牙！王牙！王牙！王牙！王牙！王牙！』

何と気分がいい。

やはり、ボクは皆の中心にいるべき存在だな。

「まずはDクラスに戦争を仕掛ける。吉井にはDクラスへの宣戦布告の使者の役目を任ずる。無事大役を果たせ」

「…下位勢力の宣戦布告の使者つて大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。少なくともそんな愚か者はDクラスにはいまい。それに、だ」

「？」

ボクは吉井をこちらに近付けさせ、そして、

「（姫路に格好いい所を見せてやれ）」

「！ー！」

そう、耳打ちした。

「（何で知ってるの！？）」

「（お前、そもそもここに来た理由は学費が安いからと坂本から聞

いたぞ。それなのに今更設備に言及する…容易に推測が付く)」

「（でも姫路さんは高嶺の花だし、それに姫路さんには他に好きな人が）」

「（吉井、安心しろ。少なくともその見解は間違いだ）」

「??」

「（何故なら…おっと、これ以降は自分で考えるのだな）」

今だに頭に？マークを浮かべつつ宣戦布告の為にDクラスへと向かう吉井。

さあ始めようか、下克上を！

余談だが吉井が向かった後に坂本が復活したと同時にボクに掴み掛かるうとして黒装束共からリンチを受けたのはまた別の話（笑ボクに齒向かおうとするからだ、身を弁える（邪笑

第四章 宣戦と代表の品格と作戦会議 〽Side Dクラス〽(前書き)

今回のバカテストはDクラスの方々に答えてもらいました。

問

人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。

シオン・アトラティカ、平賀源二、ニード・レスファの答え

1 ∴ 炭水化物

2 ∴ 脂質

3 ∴ タンパク質

4 ∴ 無機質

5 ∴ ビタミン

教師のコメント

正解です。

清水美春の答え

1 ∴ お姉さま

2 ∴ 炭水化物

3 ∴ タンパク質

4 ∴ 無機質

5 ∴ ビタミン

教師のコメント

誰でしょうか、お姉さまって？

ゼル・ディンの答え

1 ∴ 炭水化物(よく『でんぷん』と呼ばれ、一般的にはエネルギーとなるが、便通を整えると言われる食物繊維も実を言うとこれに入る)

2…脂質（炭水化物同様エネルギーとなる他、内蔵を支える皮下脂肪になる等の身体を構成する役割も持つ）

3…蛋白質（分解されると出来るアミノ酸は、一般的には筋肉等を構成する役割を持つ他、一部にはエネルギー源となったり身体の調子を整えたりもする。尚、BCAAに代表される必須アミノ酸は身体からは自然に作られない為に食物から摂る必要がある）

4…無機質（カルシウムが、骨を構成したり、血中に入っている状態だとイライラを抑えたりする等、身体を構成したり調子を整える役割がある）

5…ビタミン（カルシウムの吸収を助けるビタミンD、コラーゲンを束ねるビタミンC等、身体の調子を整える役割を持つ。）

教師のコメント

詳しくすぎです。栄養士にでもなるつもりですか貴方は。

第四章 宣戦と代表の品格と作戦会議

Side Dクラス

Side ゼル

バン！

「頼もーっ！」

LHR中の俺達の教室に突然、ドアが勢い良く叩きつけられる音と、道場破りの定番とも言える決め台詞が響いた。
いきなり何だつての…

「何だお前、今LHR中だぞ」

「FクラスはDクラスに試験戦争を申し込む！」

対応の為に出来てきた俺に、そいつはいきなり宣戦布告という爆弾を投げ付けてきやがったよ！

何て急な…ん？こいつ何処かで…

「ムツコロス！」

「底辺の分際で生意気な！」

「お姉さまとの一時に土足で踏み込むんじゃねえですわ！」

そんな俺の思考を邪魔するかのようにそいつに飛び掛かるクラスメイト達。

まあ、それは仕方の無いことか。

この学園独特のシステム『試験召喚獣』を用いてクラス対抗で戦う『試験召喚戦争』。

基本、上位のクラスは下位のクラスの宣戦布告を断る事は出来ない。

教師に試験召喚獣を呼び出す為のフィールドを展開する権限がある関係上、戦争中は他のクラスは自習となる中自分達は下位のクラスとの戦いに臨まなければならない為に大抵、下位クラスの宣戦布告の使者はリンチにあいやすい。クラス代表としてそれは分かっている。が、

「まあ、ちいと待てよ」

「止めるなゼル！」

「俺達はこのつに制裁を下さねば！」

「お姉さまとの仲を邪魔立てするんじゃないやねえと思い知らせてやるのですわ！」

尚もいきり立つクラスメート共…ってさっきからお姉さま連呼してるのは清水か！？
まあいいや、ともかく、

「話が進まんだろボケエ！」

「うぼっ！！」

『ナニヤテンダアンタ！？』

手近にいたクラスメート（人柱）にストレートをぶちかまし吹っ飛ばして黙らせておく（笑）

その時のクラスメートの反応がオンドウルっていたがキニシナイ（笑）

「お前…確かサイファーとよく雑用やっていた奴じゃないか？」

「え？サイファーを知っているの？」

「ああ。あいつとは中学からの仲だな」

学年でもトップクラスの成績を持ちながら『観察処分者』と同等の扱いを自ら志願したことから『狂犬^{きょうけん}』の異名を付けられたサイファ！。

あいつとはスコール達と共に中学からの仲だ。

その頃から事あるごとに俺の言動に突っ込みを入れては面白がる奴で、正直苦手だ。

だが俺もシオンという恋人を持っているからか『フウを守る為なら努力も手段も惜しまない』というあいつの信念には共感出来るし（上記の件もそれが理由だそうだ）、

何だかんだ言っても所謂『悪友』関係は今だにつづいている。
そこ、喧嘩する程仲が良いとか言うな！

その悪友の話に出てくる『ダメダメだけど世話掛けなくなる弟みたいな奴』って、どうやらこいつの事だな。

「お前、名前は何て言うんだ？」

「明久。吉井明久」

「俺はゼルだ。ゼル・ディン。宜しくな、吉井」

「よ、宜しくねゼル」

こいつ、確かに『世話掛けなくなる弟みたいな奴』だな。

「で、いつ開戦だ？」

「えーと、今日の午後二時で」

「おう、分かった。あ、そうそう、確かFクラスの代表は坂本とか言っただな……」

「へ？雄二がどうかしたの？」

「代表に伝えとけ。出会ったら拳で語ろうぜ、と」

「…何処の熱血漫画？それ」

「うつせ。とにかく頼んだぞ、吉井」

「うん。分かったよ、ゼル」

「おう、また後でな」

そう言つて吉井をFクラスに帰す。

さて、あとは後ろのクラスメート共だな…

「何であいつを帰しちまつたりすんだ！」

「そうだ！底辺の分際で俺達に勝負を挑もうとか生意気な奴らに目にも物を見せてやらないと！」

「お姉さまとの一時を邪魔する輩は馬に蹴られて死んじまえますわ！」

「お前ら落ち着け！というか清水はさつきから誰だそのお姉さまつて！？」

「そうですよ！ゼルさんにはゼルさん成りの考えであの判断を！」

宣戦布告の使者を逃がすという判断にいきりたつクラスメートと、それを宥めるニードとシオン。

だが二人の説得も聞きそうにないなこりゃ。

「お前ら恥ずかしくねえの？そんなガキみたいな手を使おうとかさ

…あ、まだガキ（未成年）か」

「何だと！？」

「何ですって！？」

「力の差を理解してるかはともかく、あいつらはルールに則つてこちに宣戦布告してきたまで。それを暴力に頼つて握り潰そうとか正に我儘なガキじゃねえか」

「……………」

「あいつらがルールに則って勝負を挑むと言うなら、こつちもルールに則って完膚無きまでに返り討ちにしまえばいい話だろ」

「そつだ！俺達には『試験召喚戦争』という公式に認められた勝負の場がある！」

「その勝負の場で私達の主張を、不平不満をぶつけられればいいんです！」

「フオローありがとな、ニード、シオン。それに、試験召喚獣の扱いに慣れるまたとない良い機会じゃねえか。物事、そうやってプラスに考えねえと！」

『…そつだな』

『試験戦争で俺達の実力を見せ付けねば！』

「待っていて下さいませお姉さま。必ずや貴方を豚共から救い出してそれからハアハア」

「美春さん…目が恐いです…」

何とか今日の午後にやるであろうFクラスとの試験戦争に向けて団結してくれたみたいだ…何か目が危なくなっている約一名も入れてただ、ああは言ったものの、戦略を立てないと厳しいかなこりゃ…

「シオンとニードに、あと平賀、ちょっと来てくんねえか？」

「あ、はい、ゼルさん」

「何だゼル？」

「どうしたディン君？」

シオンとニード、それにDクラスでも指折りの実力のある平賀を呼び出す。

「お前らだから言うが…この戦い、只単に定石通りに突っ込んで行っても負ける」

「何を弱気な事を言っているんだディン君。俺達の実力を見せ付け

ればいいと言ったのは君じゃないか」

「まあ、そりゃそうだし俺も負けてやる気はこれっぽっちも無い。だがな……」

「何だ、Fクラスに勝つ要素が有るとか、Dクラスに負ける要素が有るとか言うんじゃないだろうな？」

「実を言うとFクラスには……その勝つ要素がある」

「ああ、あいつらか」

「あの三人ですか……」

「む、レスファ君もアトラティカさんも知ってるのか？」

「ええ」

「ああ、ゼル、説明してくれよ」

「おう。実はFクラスにアーヴァインとセルフィ、それにシュウがいるんだよな。三人共実力はAクラスでも上位の方なんだ」

「何だつて……！？アーヴァインとは『論理派狙撃手』アーヴァイン・キニアス、セルフィとは『電波式演算者』セルフィ・ティルミット、シュウとは『万才の麗人』シュウ・フェイオンの事だろう？そんな凄い人達が何でFクラスに……？」

驚きを隠せてない平賀。

やっぱあの三人は大分知られているようだな。

「何でもアーヴァインは振り分け試験中にゲロ吐いたらしくて、」

「セルフィさんは、そのアーヴァインさんを介抱するために試験放棄したみたいで、」

「シュウは寝落ちしちまったんだと」

「な、何だよそれ……とにかく、まともに行ったらその三人に餌食にされる、という訳か」

「ああ。俺の保健体育なら余裕で叩くことも出来るが、他にあの三人誰が来ても対抗出来るのはシオンの国語・古典くらいしか無いな」

「そこまで凄いとは…勝算はあるのか？」

「安心しろ。俺は負けてやるつもりはこれっぽっちも無いと言ったはずだ。そのためにお前達を呼んで作戦会議をしようと思っている」

その俺の言葉を合図に、打倒Fクラスに向けての作戦会議が始まった。

第五章 最強クラスとロリシヨタ同盟と死亡フラグ？（前書き）

問

光量子仮説による光電効果の理論的解明でノーベル物理学賞を受賞した物理学者の名前をフルネームで答えなさい。

アーヴアイン・キニアス、紫宮王牙、セルフィ・ティルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『アルベルト・アインシュタイン』

教師のコメント

正解です。アインシュタインといえば相対性理論で有名ですが、ノーベル賞を受賞したのは実はこっちの方なんです。

紅月姫香の答え

『アルバート・ワイリー』

教師のコメント

ロックマンですか。

吉井明久の答え

『アーデルハイト・バーンシュタイン』

教師のコメント

先生はネスツ編ではクーラが好きです。

土屋康太の答え

『サラ・バーンスタイン』

教師のコメント

土屋君、後で職員室に来るように。

第五章 最強クラスとロリシヨタ同盟と死亡フラグ？

「いやあ、危なかったなあ」

程なく、全くの無傷でFクラスに帰ってくる吉井の姿があった。

「大丈夫かい？吉井君…って聞く迄もないか」

「安心しました…」

「良かった…ウチが傷を施す余地は十分にあるって訳ね」

「あー何か精神的に死にそう！」

その吉井を出迎える輪にボク達も入る。

「ふふっ見事大役を果たしたようだな」

「あ、紫宮さ「だからボクは男だと言っている！」く、君の言うとおりだったよ」

「信じられん…下位クラスの使者が無傷で帰ってくるなんて（つまらん）」

「何か言った雄二？」

「気のせいだ」

「あ、そうそう、Dクラスの代表のゼルが雄二に、『相まみえたら拳で語ろうぜ！』だって」

ちよっと待て。

「吉井、そのゼルと名乗った奴、まさか…」

「紫宮、お前の想像通りだと俺は思う。あの『小艦巨拳』ゼル・デインだ。そつかあいつが代表か…」

『小艦巨拳』ゼル・デイン。

その小柄な体躯に不釣り合いな腕っ節の強さ（それを武器に中学時代『暴れん坊ゼル』として名を馳せたらしい）と、保健体育だけが異常に高い（それでも土屋よりはバランスがとれている）学力からそう呼ばれている。

奴の総合力からすればDクラスの代表は妥当な線ではあるが、これは少し厄介だな…

「坂本、ブリーフィングを開きたい。キニアス達キーマンとなる面々と共に屋上に来い」

「命令口調が気に障るが、分かった。お前ら、呼び出したぞ」

「りょーかい」

「了解や」

「分かったわ」

「分かりました」

「うむ」

「うん、分かった」

「……………（サスサス）」

坂本の呼び出しで集合した面々と共に、屋上へと向かう。

その途上、土屋と吉井による先の土屋の覗きの件でのやり取りを小耳に挟んだが、あそこまで土屋は強情だとはな（苦笑）

そのやり取りの中に、

「サイズは？」

「…A」

と、明らかにボクの胸であろう話が出た時にはツインブレイズを突き付けてやった。

ボクは男だと言っているだろう、無礼者。

「明久、宣戦布告は済ませてきたな」

「一応今日の午後二時に開戦予定と告げてきたよ」

屋上に到着後、坂本はフェンス際の段差に、ボク達はそれぞれ好きな場所に座り、ブリーフィングを始める。
ちなみにその際、土屋が無礼にもボクのワイシャツの隙間や姫香達のスカートを覗こうとしたので鼻面にヤクザキックを見舞ってやった。

「そしたらその前にお昼ですね」

「そうだな…明久、今日位まともなモン食えよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

む、吉井は普段どんな食生活を送っているんだ…？

「えっ？吉井君ってお昼御飯食べない人なんですか？」

ボクの気持ちを代弁したかのように姫路が聞く。

「一応食べてるよ」

「…あれを食べてる、と言えるのか？」

「何が言いたいのか？」

「いや、お前の主食って…水と塩だろ？」

『え！？』

坂本…今何て言った…？

「失礼な！きちんと砂糖だって食べているさ」
『ええええええええええ！？』

その時、ボク達の絶叫が屋上に響いた。
し、信じられない…

「え、な、何？皆」

「あの、吉井君…水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ…」
「水は飲む、塩と砂糖は舐める、が表現としては正解じゃろうな」
「せやな…って二人とも突っ込む所ちゃうやろ！」

「何かサバイバル生活を通り越していると思うのは僕だけじゃ無い筈だよね！？」

「今までどう生き長らえてきたのよ！？」

「ダメだよ…そんな粗食…」

「よ、吉井…それは虫けらにすら劣るぞ…」

「何この非難の嵐！？」

何を言うか！？

この反応が健全な事すら分らないか！？

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「仕送りが少ないんだよ！じゃあ、他の皆はどうなのさ」

吉井、早く自らの食生活（いや、坂本の発言を踏まえれば金銭感覚か）の異常を認める。

「俺は何時も購買のパンか学食だ」

「ウチは何時もお弁当作ってきてるわよ」

「私もお母さんがお弁当を作ってきてくれるので」

「わしも弁当じゃ」

「私もそうね」

「ウチもや」

「僕のはセフィが作ってくれ『総員狙』うるさい（ズギヤアアア
ン）」「グガゲゴ!」

「…購買パン」

「「ポ○リスエツトの顆粒を溶かした水」」

ずでーん!

…何故ずっこける?

吉井と、ボクと共に答えた姫香を除いて皆?

「ちょ、お前ら、マジか!？」

「人を非難しといて自分達も十分な粗食振りやないか!」

「いやいやちよつと待って、え、本当に!？」

「それじゃ五十歩百歩でしょ!」

「ウチ…人は見掛けじゃないって改めて実感したわ…」

「信じられぬの…」

「紫宮さ「だから男だ!」君も紅月さんも…だから華奢だったんで
すね…」

「へえ…みんなちゃんとしたお昼食べてるんだね」

『少し黙（りなさい）（って下さい）』

何を言うか。

ボクに言わせれば貴様ら贅沢だ。

大体日本人は元は一日二食「いや何時の話だよ!？」「んと…室町
時代まで?」「地の文に突っ込むな坂本、あと姫香、マジレスしな
くていいぞ」だろうに。
というか、

「島田、貴様は呼んでいない筈だが」

「あら、同席しちゃいけない訳でもあるの？」

「来たところで理解できまい」

「…紫宮には一度、Das Brechen…えっと、日本語だと

…」

「…調教」

「そう、調教が必y」島田さん？（ゴゴゴゴ!）「ひいつ!？」

「王牙君に断りなく…ズカズカ介入した挙げ句…調教が必要とか…
一体何考えてるのかな？」

「えーと…そしたら間をとってZuchthtimgung」

「間をとって…何言ってるのかな?…それに日本だよここ…郷に入
つては郷に従えだよ？」

「…日本語では確か折檻「殺つちやえバーサーk」失礼しましたあ
あああああ!」

程なく屋上から退出した島田。

吉井に獄炎ナツクルをぶちかますのが趣味の奴を近付けさせる訳に
は行かないからな。

それにしても姫香可愛いよ姫香、ボクの身を案じて必死で怒るなん
て。

「……あの、良かったら皆さんのお弁当、私が作ってきましようか
?」

『え?』

そんな感じで騒がしい中、ふと姫路がこう切り出した。

「いいの姫路さん!? 僕、塩と砂糖以外の物食べるの久しぶりだよ
!」

「はい。明日のお昼で良ければ」

早速食い付いたのが吉井。

まあ…あの食生活だからな。

しかし、

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃ無ければ」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「そしたら好意に甘えようかしら」

「ウチの分はええよ。アービンの含めて好きで作っとるんやし」

「僕の分もセフィが作ってくれるからいいよ」

…キニアスやティルミットは辞退したとは言え、合計六人分（ボクも辞退するつもりだ）を作るのは大変では無いか？

「（おい姫路）」

「（紫宮君？）」

「（手作り弁当でアピールとは中々いい手だが、ボク達の分まで作らなくてもいいんだぞ？）」

「（いやいや、紫宮君たちの食生活聞いたら放っておけませんよ！）」

「

「（この位問題無いと思うぞ。作者だって平日は同じ食生活なのだから）」

「（そこでメタ発言ですか！？）」

「（とにかく…ボクの分は味見する位でいいからな）」

「（私のも…いいよ）」

「（分かりました…）皆さん、期待してて下さいね！」

何やら釈然としないながらも了承した様子の姫路、自信満々の様子で明日の昼を期待させるように宣言する。

と、そこへ、

「姫路さん、前々からお「それにしても今日はやけに照り返しが強いな！太陽は少し出しゃばり過ぎで無礼ではないか！？」モガガ！？」

突如、吉井が告白という爆弾を投下しようとしたため急ピッチで他へ注意を向け、吉井の口を塞ぎ、少し離れた所へと拉致（笑）する。

「（プハッ！一体何すんのさ！？）」

「（吉井…今姫路に告白しようとしただろう）」

「（え、こ、告白だなんて）」

「（そういう台詞は姫路と二人きりの時に言うものだぞ）」

「（りよ、了解…）」

—先ず吉井を落ち着かせてから皆の元へと戻る。

「紫宮、いきなり明久を引っ張って何処に行ってたんだ？」

「野暮用だ。それより坂本、午後からの試召戦争の話をそろそろすべきだろう？」

「そうだな」

昼御飯談義ですっかり忘れかけていたが、本来はここでブリーフィングをやる予定だったぞ。

「雄二に紫宮。一つ気になっておったのじゃが、何故Dクラスなのじゃ？階段を踏むならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラ

スじゃろ？」

「確かにそうですね」

「せやな」

「そうだね」

「まあな。だがそれも当然、考えがあつてのことだ。紫宮、お前は何の考えでDを選んだ？」

聞けば坂本もDクラスに挑む気だっただけらしい。

「最大の理由は、Eクラスは戦うまでもない相手だからだ」

「でも僕達よりもクラスは上だよ？」

「振り分け試験の成績は、だ。では逆に聞くが、ここには坂本が挙げたFクラスのキーマンが集結している。吉井、お前はどのメンバーをどう見る？」

「美少女が六人と女たらしが一人、あとムツツリが一人にバカが僕を入れて二人だね」

「何？美少女だと！？」

「ええっ！？何で雄二が美少女に反応するの！？」

「……（ボタボタ）」

「ムツツリ二！？鼻血が垂れてるよ！？」

「その前に美少女の数が多すぎる（だろう）（のじゃが）！」「

「へ？だって姫路さんにティルミットさんにフェイオンさんに紅月さんに秀吉に紫宮さ」「（ボク）（わし）らは男（^だじゃ）！」「ハモった！？」

「……」

ガシッ！

「木下、お前も苦労しているのだな……」

「お主程ではないわ、紫宮…」

「お前とはいい友情が育めそうだな」

「うぬ。あ、ならばわしの事は下の名で呼ぶが良い。わしも王牙と呼ぼうぞ」

「そうだな、秀吉。そして二人力合わせ、虫けら共に身を以て分かってやらねばな」

「そうじゃの。わしが」

「ボクが」

「男だという事を！！」

ここに一つの（女と間違われる者同士の）友情が生まれた。

「あそこで勝手に友情を育んでいる二人は置いてだ、キニアスに紅月に紫宮にティルミットに姫路にフェイオン、そして教科を絞れば康太… Aクラスでも上位に入れる戦力が粒揃いな今、このFクラスは最強だ」

「最強… か。悪い気はしないね」

「けどDの代表はゼルだし、他にもシオンやニード… 『三つ編み書庫』とか『大気駆動』と言えば分かりやすいかしら、その二人もいる。心して掛からないとまずいわ」

「せや。ゼルは当然、二人も腕輪持つてる可能性が高いで」

「そうだな。それ故に皆をここへ集めた訳だが、何かいい案は無いか？」

その後ろで坂本達が作戦会議をしていたと知ったのは、開戦十数分前。

五章 最強クラスとロリシヨタ同盟と死亡フラグ？（後書き）

唐笠さん、感想有難うございます！

六章 開戦と先手必殺と一つの懸念（前書き）

今回もDクラスのメンバーに答えて貰いました。

問

『雪国』や『伊豆の踊子』等で知られ、日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した小説家の名前をフルネームで答えなさい。

シオン・アトラティカ、清水美春、平賀源二の答え

『川端康成』

教師のコメント

正解です。

ニード・レスファの答え

『三島由紀夫』

教師のコメント

不正解です。ちなみに彼は『金閣寺』や『潮騒』等で有名ですね。

ゼル・ディンの答え

『小林多喜二』

教師のコメント

間違え方が高度過ぎます…

第六章 開戦と先手必殺と一つの懸念

Side ゼル

P i P i P i P i !

さあ、

「戦争の開始だ!」

『おおおおお!』

その雄叫びと共に、十人単位のチームで散開するクラスメート達。

「何処かのチームが先生を見つけ次第、俺達も直ぐに向かう。準備に取り掛かってくれ」

「分かりました!」

「了解!」

「分かった!」

『おう!』

此処に残ったのは俺の他に、主力であるシオンとニードと平賀、そして選りすぐりの護衛数人。

と言っても此処をセオリー通りに最終防衛ラインにするつもりは無い。

作戦が次のステップへ入り次第、ここを出る。

俺達の作戦はこうだ。

十人単位のチームを四つ編成し、それぞれが保健体育担当の大島先生が学年主任の高橋先生を見つけ次第こちらに合流、そして俺の保

健体育を武器に速攻を仕掛ける、というもの。

チームをもう少し小分けした方が見つけやすいのでは？という意見もあったが、その隙を突かれて各個撃破されては元も子も無い。

セルフィやアーヴァイン、シュウが直ぐに出られない状況下のFクラスはほぼ雑魚と言って構わないが、それは一対一の状況なら、である。

一人ずつは論外、三人か四人単位でもそれより一人でも多い人数で当たられては苦戦は必至だ。

だが十人位なら向こうがそれ以上の人数をぶつけてきたとしても、今度は召喚フィールドの広さという制約がある。

必然的にあぶれる人員が出てくる為、人数上の優位性を封じることが出来る、という訳だ。

まあ、そもそも何でセオリーを無視して開始早々俺自ら出向くのかと言えば、セルフィ達の存在だ。

試験召喚獣の能力は、最近受けたテストの点数がそのまま反映される。

今日が二年生最初の授業であることを考えれば、最近受けたテストはクラス振り分け試験、という事になる。

そして振り分け試験では再試験は認められておらず、途中放棄は全教科0点となる。

この制度が良いか否かと言えば否だがそれは置いて、つまり途中退室したセルフィとアーヴァインは今前線に出られる状況に無い。

シュウの点数は未知数だがFクラスに居る事を鑑みれば大してとれていない筈だ。

故に三人は試召戦争中に受けられる回復試験の為に暫く出られない

そこを突き、三人が出てくる前に勝負を決めてしまおう、という事だ。

「ゼルさん！清水さん率いるAチームが大島先生を確保した様です！」

「よっしゃ！それじゃ向かうぞ！」

『おおおおお！』

シオンの連絡を受け、清水達と合流すべく教室を出る。

だが一つ懸念がある。

Fクラスの代表である坂本は、何で始業式早々に戦争を、しかも俺達Dクラスに仕掛けたのか、だ。

俺達は中学からの親友だった関係で、三人がFクラスに居ることは既に知っている。

戦争を仕掛ける上で三人の存在を公にしたいくないという考えは分かんなくもない（いやそれはないか？）が、それならば俺達の仲間が居ないEクラスかCクラスに仕掛ける筈だ。

三人の力が万全ならば俺達Dに仕掛けるのも不思議では無いが、万全ならだ。

今この時期に仕掛ける等正気の沙汰とは言えない。

まさかとは思うが…

「大島先生を連れて「居たぞ！Dクラスだ！」来やがりましたか豚共…！」

まあいいや。

「大島先生、Dクラスのゼル・ディンが向こうのFクラス全員に戦闘を仕掛ける！科目は保健体育だ！」

「承認した！」

『ちっ！試獣召喚！』

『サモン 試獣召喚だ！』

「Dクラス平賀源二、助太刀します！試獸^{サモン}召喚！」

保健体育

Dクラス

ゼル・デイン 583点

平賀源二 142点

V S

Fクラス

13名 平均86点

『な、何なんだあの点数は！？』

「流石だねデイン君」

「おうよ！そんじゃ平賀、背中には任せるぜ！」

「了解！」

細かい事はこいつらをノシてから考えるか！

Side 雄二

「代表、福村達の部隊がDクラス代表率いる部隊と戦闘状態に入ってたそうだ。何でも保健体育の大島先生を連れているらしい」

「そうか。キニアス達の言った通りになったな。須川、リターンして康太に出撃、フェイオンに前線の後ろで待機するよう伝えてくれ」
「了解」

作戦通りの展開にほくそ笑みつつ、伝令役の須川に次の指令を伝える。

俺達の作戦はこうだ。

向こうがティルミット達の存在を警戒して速攻を仕掛けるのを見越して、康太とフェイオンをぶつけて時間を稼ぐ。

その間に回復試験を受けたキニアスとティルミットを防衛ラインに配置しつつ、姫路がDクラス代表のデインを叩く、という筋書きだ。紫宮と紅月は今回は回復試験に専念してもらう。

ティルミット達がエースなら、二人はこのFクラスにとっての最後の切り札だからな。

後々のAクラスとの勝負に向けて、今はまだ存在を公にすべきでは無い。

本当だったらこの時間稼ぎ役は康太だけの予定だったが、フェイオンが国語系科目だけ400点台を叩きだしていたのは僥幸だった。

保健体育に無類の強さを誇るデイン、国語系科目でトップクラスの実力を持つアトラティカ――

Dクラスのエース格二人を潰せるのは大きい。

さて、第一段階は（といっても相手任せな物だが）クリアした。

今後どう転ぶか…それは康太とフェイオンの活躍に掛かっている。

S i d e 康太

保健体育
Dクラス

ゼル・デイン 581点
平賀源二 140点

V S

Fクラス

6名 平均87点

想定の内とは言え、一方的な光景だった。

デインが使役する自らの拳を武器としたカジュアルな格好の召喚獣の攻撃によって、次々に葬り去られるクラスメート達の召喚獣。まだ制御し切れていないのか所々とりこぼしが見られるが、それも平賀の召喚獣が剣を一閃させる事で結局は同じ末路を辿る。そして、

「戦死者は補習うううう！」

『嫌だああああああ！』

何処からともなく駆け付けた鉄人によって補習室に連行されて行く。伊達に『小艦巨拳』の異名を持っていないということか。

「…待たせた」

「おおムツリーニ、来てくれたか！」

「Dクラス代表、何かやべえよ！何とかしてくれよ！」

「…任せろ」

「お、新手か…ってお前、土屋か…！」

それまで、相手が突撃して来なかったのをいい事にシャドーボクシングをしていたデインが使役している召喚獣が、急に動きを止める。

俺の存在はやはり、向こうも知っていたか。
さて、

「サモン Fクラス土屋康太、Dクラスのゼル・ディンに戦闘を仕掛ける。
試獣召喚」

Fクラス

土屋康太 574点

俺達の勝利の為に、しっかりと足掻かせてもらっぞ…ディン！

六章 開戦と先手必殺と一つの懸念（後書き）

今回、思いのほか執筆の調子が良かった事から二日置きでの更新となりました… 何時もこの位調子が良いといいなとは思ってますが…

ゼル達の腕輪の能力は本編で披露次第、後書きやキャラ紹介欄等に掲載しようと考えています。

七章 回復と友への思いと封印されしムッツリーニア（前書き）

問

以下の空欄を埋めなさい

『米が無ければどうして』を食べないのか』

（西暦3世紀、当時の中国にあった王朝『西晋』の恵帝の民衆に向けての発言）

アーヴァイン・キニアス、紅月姫香、紫宮王牙、セルフィ・テイル
ミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『肉』

教師のコメント

正解です。似たような発言にフランス王妃マリー・アントワネットの「パンが無ければバター入りのお菓子を食べればいい」が有名ですが、こちらは実を言つと貴族達による捏造らしいですよ。

79

吉井明久の答え

『塩』

教師のコメント

思わず。をつけそうになりましたが、それで生きていけるのは貴方だけです。

土屋康太の答え

『女体』

教師のコメント

鼻血を吹き出しながら答えないように。答案が血塗れで見づらいですよ。

七章 回復と友への思いと封印されしムッシリーニア

カリカリカリカリカリ

「……………」

カリカリカリカリカリ

「……………」

カリカリカリっ

「次の問題を出せ」

「あつ…私も」

「ウチのも頼みますよ」

「僕のも頼みますよ」

「私のもお願いします」

「了解しました」

パサッ

カリカリカリカリカリ

「……………」

『戦死者は補習うう！』

『嫌だあああああ！』

退屈だ。

はつきり言つて、退屈以外の何物でもないな。

今ボク達五人は、この試召戦争の最中に受験が認められている回復試験を受けている。

科目は、作戦上早急な戦線配置が求められるテイルミットとキニアスはそれぞれの得意科目、トドメ役の姫路は総合、今回は出番自粛となっているボクと姫香は全ての科目を受験している。

しかし『学園始まって以来の神才』と呼ばれたボクにとってこの試験、例え屈指の難しさと言われる文月学園の試験であれど簡単過ぎ、単純な流れ作業をやっているような感覚に陥りがちだ。

そして陥りかける度に退屈を覚え、欠伸が出る。

ボクは何のためにこんな単純作業をやっているのかと思いたくなる。同じくこの試験を受けている仲間達も同じ思いだろうが、それでもこの後の役目を考えれば幾分がやる気も違うだろう。

今回は完全待機のボクと姫香に同じようなモチベーションで臨めと言われようと、無理だ。

というかボクに命令するな、無礼だぞ。

だがそんな思いを抱きはじめると途端に思い出すのは、皮肉にもその同じく回復試験に臨む仲間達。

そして、

（吉井と秀吉は大丈夫か…？）

親友の想い人と、今日を以て固い友情を結んだ友。

彼らを思い出す事で、ボクの気が引き締まる。

そしてボクの（いや、ボク達か）役目を思い出し、再び試験に臨むモチベーションになる。

（ボクだけだらけるのは性に合わないな）

そう思い立ち、再び問題に目を向けたその時の事だった。

『戦死者は補習うう！』

『王牙お姉さまあああああ！I・l・l b e b a c kですわあああああああ！』

ぞわっ！

キヨロキヨロ

何か聞こえたらしい仲間達がふと顔を左右に向けるが、

トントン

（気のせいだ。それより今は試験に集中しろ）

とメッセージを送って気を取り直させる。

うん、何か聞いたのかも知れないがそれは絶対に空耳だ。ボクが空耳だと言ったら空耳だ。

現にボクは何も聞こえていないぞ、何も。

そう、何処ぞやのレスなストーカーが何を勘違いしたか男のボクの名を叫んでいる、そんな声など聞こえていない。

何があるうと聞こえていないぞ、うん（ガクガクブルブル）。

S i d e ゼル

「…加速」

ズシャアッ！

「戦死者は補習うう！」

「あだだだだだだ！」

「うつつぐぺぺぺぺ！」

信じられない、信じたくない光景だった。

「^{サモン}試獣召喚だ！」

クラスメートが代表である俺を守ろうと新たに召喚しても、

「無駄だ…加速」

ズシャアッ！

そう土屋が呟いた次の瞬間には奴の忍者のような召喚獣が一太刀で斬り伏せた後だった。

「そこかつ！」

と、その隙を突いて、俺自ら止めようとしても、

「…クロックアップ」

ヒュン！

「カブトかよつと！」

ガキイン！

Dクラス

ゼル・デイン 487点

腕輪の能力で瞬時にカウンターを仕掛けられる。

何とか防御出来ているためかダメージはそれ程では無いのだが、このままではジリ貧だな…

正直、あの三人さえ抑えれば恐れる者はいないと考えていたFクラス。

作戦通り俺の保健体育で押せば楽勝だと最初は思っていた。その認識を変えざるをえなくなったのは、数分前だろうか。

数分前――

「何なんだあの点数は！？」

「代表に肉薄しているだと！？」

思わぬ強敵の登場に騒めく仲間達。

俺も同じように驚愕していた。

ただ、微妙に意味は違うが。

「ちっ、土屋か……」

「知っているのか、デイン君？」

「ああ。あいつも俺と同じように保健体育だけが妙に得意なんだ…他の教科は俺以上に壊滅的だな…」

そう、土屋は入学当初から俺と保健体育のトップを争ってきた者同士。

大きく水を開けての三位にはあの『学園始まって以来の神才』紫宮王牙が常に入っていたのだから、土屋及び俺の凄さは、言えば学園の皆は分かる。

それ以外の教科はドンケツ争いに終始するといった有様ではあるが、だからこそFクラスにいるという可能性は大いにあった。それを失念しちまうとはな…

そう、俺の驚愕はそこにあった。

（こりゃ、一筋縄では行かなくなってきたかな…）

だが、負けてやるつもりは毛頭無い。

肉薄しているとは言え、俺の方が上回っているのは事実だ。

おまけに、奴の忍者を模したであろうその召喚獣、風になびきそうな薄い服からして防御力は紙と言っていい筈だ。

一方の俺の召喚獣。

一見して奴以上の軽装に見えるが、その実ジャケットには鉄板を仕込んだ防弾モノ、デニムも生地の分厚い作業用仕様とあって、防御力は格段に違う。

基本、全科目の総合力によって武装の質が変わってくる召喚獣。

それもあって、点数を温存して勝てそうだと思っていた。

そう、

「先手必勝！」

「……加速！」

ヒュン！

「うおっと！？」

ガキン！

ザシュツ！

「な、何！？」

瞬時に飛び掛かった途端姿が消えたと同時に咄嗟のガードの上に何かがたたき込まれたのと、

Dクラス

平賀源二 D E A D

「戦死者は補習うう！」

「何……だと……」

俺と共にFクラスの面々を薙ぎ倒していった平賀が茫然自失としていた様子に振り返って、

……その勇者を思わせる召喚獣が腰を境目に真っ二つに綺麗に切り裂かれているのを目撃する迄は。

「平賀が…馬鹿な…」

「お、おい！今あいつ何をしたんだ！？全く見えなかったぞ！？」

「ぜ、ゼル！？無事か！？」

何の事は無い。

各科目で400点以上（総合なら4000点以上）を有している場

合に召喚獣に装着される腕輪。

恐らく土屋はその能力を発動したまで。

それだけの事…だ。

だが『それだけの事』は、俺の認識を改めさせるには十分だった。

そして現在――

「試^{サモン}獣召喚！」

「…マツハ」

ズシャアッ！

「ウソダンドコードーン！」

一人、また一人葬られていく仲間達。

何時の間にか、土屋の撃破数は二桁に届く迄になっていた。
それでいて奴の点数は、

Fクラス

土屋康太 469点

あれ程腕輪の能力を行使したにも関わらず大した減りを見せていないのだ。

他の班が知らせを受けて別の先生を連れてきてはいるが、それまでに持つかどうかは分からない。

それでも仲間達の一見勝ち目の無い特攻が緩む事は無い。

代表たる俺が討ち取られたら即負けだからだ。
ならば、そいつらの為にも、

「うおおおおお！」

「…無駄だと言っている。加速」

（出し惜しみはいけないな！）

ヒュン！

「今だ！デュエル！」

バキイーン！

「っ！何！？」

俺の召喚獣に付いていた腕輪が光ると同時に、
思わぬ衝撃によるけ
る奴の召喚獣。
よし、成功だ！

「さあ、反撃だ！」

まずは、

「ラッシュパンチだ！」

ガキヤツガキヤツガキヤツ！

Fクラス

土屋康太 337点

やはり軽装が仇になったか、忍者刀を用いてガードしながらも、かなりのダメージを負っている。
よし、これなら行ける！

「ヒールスマッシュだ！」

ドギアッ！

土屋康太 220点

忍者刀ガードをも巻き込んで踵落としを打ち込ませる。
効果は抜群みたいだ。
さあて、

「フィニッシュ行くぜ！ファイナルヘブン！」

キイイイイイン！

召喚獣の両手、赤と黒で彩られたグローブを装着した両手が眩い光を放ち、
そして、

ズドオオオオオオン！

土屋康太 D E A D

右ボディーブローが炸裂すると同時に、物凄い衝撃波と共に吹っ飛ばす土屋の召喚獣と、戦死を知らせる表示。
そして、

「戦死者は補習うう！」

「……………後を頼む」

鉄人によって連行される土屋。

障害排除…と。

「バ、バカな…ムツツリーニが…」

「Dの代表は化け物か何か！？あいつにどう勝って言うんだよ！？」

土屋が撃破された事で、動揺が広がるFクラス陣営。

て言うか誰だ俺を化け物扱いする輩は？

まあ最も、さっきまでにはやらねえよ。

何故なら、

「ゼルさん！凄い格好良かったです！」

「ありがとな、シオン。あー、それとな、」

「はい、何でしょうか？」

「ちと変わってくれないか？」

Dクラス

ゼル・デイン 1点

「あ、はい。分かりました」

「わりいな」

そう、さっきの腕輪の能力の影響で、点数が根こそぎ持っていけたのだ。

俺の腕輪『デュエル』は、両手に膨大なエネルギーを込めつつ、行使の瞬間に打撃をぶつけた敵をよろめかせて連続で技を繰り出していくものだ。

よるける時間と技の威力は行使時点での点数に比例し、その間は打撃から発せられる衝撃波の影響で第三者が攻撃しようとする逆ダメージを負う仕様だ。

代わりに戦死しない程度に点数を根こそぎ消費する為こそ、という場面でしか使えないが。

故に、もう俺の保健体育でのごり押しは使えなくなった。

回復試験を受けてもその間にアーヴァインやセルフイが前線に来るだろう。

「それじゃ後は頼むな、シオン」

「はい、任せて下さい！ゼルさん！」

だから、俺はもうお役御免。

後は代表として皆を纏めつつ、不意打ちを警戒するだけだ。

幕間　獅子と狂犬とトトカルチョ！（前書き）

今回はAクラスのメンバーに回答してもらいました。

問

光は波であることを発見したイギリスの物理学者の名前をフルネームで答えなさい。

木下優子、霧島翔子、工藤愛子、久保利光、キステイス・トウリー
プ、スコール・レオンハートの答え

『トーマス・ヤング』

教師のコメント

正解です。ちなみに元々ヤングは医師で、視覚の研究から興味を覚えて光学に傾倒したそうです。

リノア・カーウェイの答え

『トーマス・エジソン』

教師のコメント

それは発明王です。

幕間 獅子と狂犬とトトカルチョ！

Side スコール

「FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けた？」

それを木下から聞いたのは昼休み明けて直ぐだったか。
何でも、LHR中のDクラスにFクラスが早速、宣戦を布告したら
しい。

「それはまた…急な話だな」

「全くね。戦力もろくに整っていない状態で戦争を仕掛けるだなんて、どうかしているわ」

「まあお陰で私たちは自習だけだね」

「リノア、貴方の場合はスコールと……でしょ？」

「ちよっキステイス！？何その間！？」

「リノア、キステイスの想像を実現しないか？」

「ス、スコールまで（照）」

「レオンハート君が何をしようとしてるか想像ついたけど止めなさい、一応授業中よ」

「…悪かったな」

「ところで三人は、この戦争の展開をどう見る？」

ふと、キステイスから投げ掛けられた今回の戦争の勝敗予想。

まあ、普通に考えれば、

「私はDクラスね。大した努力もしない奴ばかりの連中がいきなり上位の設備を貰おうとか虫が良すぎるし、無理ね」

今の木下の予想に行き着くだろう。

だが俺達は、Fクラスに『普通の考え』が通用しない要素があるのを知っている。

故に、

「俺は…どちらに転ぶか分からないな」

「私もスコールと同じ意見かな」

「私もそうよ」

「あら、それはどうして？」

戦況は読めないと答え、木下もまた疑問を挟む。

「Fクラスにはセルフイとアーヴァイン、そしてシュウがいる。木下も三人の名なら良く知っているだろう？」

「あの三人がFに！？いないとは思ってたけど…」

「うん。まあアーヴァインとセルフイは途中退室しちゃったから振り分けテストの成績は0だし、シュウも寝落ちしちゃったからどの位の点数取れているか分からないけどね」

「そしてDクラスの代表のゼルは私達やその三人とは親友でその事も知っている…つまり三人の回復試験が終わって合流するまでにF他の面々が持つかがキーポイントになるわね」

そんな時である。

「…私はFクラス」

「うわ！？…代表いたんだ（汗）」

このAクラス代表、霧島翔子が会話に介入してきたのは。

「霧島は何故そう思ったんだ？」

「…Fクラスの代表は雄二。レオンハート君達の話を加味しても、それだけであの雄二が戦争を仕掛けるとは思えない。だから他に勝てる切り札を用意していると思う」

そう話す霧島。

その顔は何やら自信に満ちていた。

「霧島さん、その雄二っていう人は知り合い？」

「…うん、雄二とは幼馴染み。初めて会ったときには神童って持て囃されていた」

「へえ、そうなの…だけどそれは初めて会った時の話でしょ？今Fにいる辺り昔とは違うんじゃないかしら？」

「ううん、やる気を出した時の雄二は今でも神童」

随分、雄二というFクラスの代表を買い被っているようだ。

まさかとは思うが…

「…霧島。まさかお前、その雄二という奴の事が…？」

「…うん（照）好き」

『え！？』

…リノア、キステイス、木下、その鳩が豆鉄砲食らったような顔は分かる。

俺もびつくりだ。

何故なら…

「霧島さんって女の子にしか見つめたりしなかったから、私てつきりレズなのかと思ってた…」

そう、霧島には同性愛者ではないかという噂がまことしやかに流れていたからだ。

「私もよりノア。霧島さん、何でそうしてたの？」

「雄二に悪い虫が付かないように見張ってた」

「そ、そうだったの…でもそしたら、告白とかしなかったの？」

「何度も言っただけで断られた」

成る程そういう訳か。

しかし、何度振られても諦めない霧島も霧島だが、才色兼備な彼女の告白を突っぱねる坂本（名字は坂本、というらしい）も随分訳ありのようだな。

奴の、女を見る目が無いのか、或いは…

「霧島…もしかしたら坂本には他に意中の人がいるんじゃないか？」

「そ、そうだよねスコール。でなかったら霧島さんみたいな綺麗な人からの告白を断る訳が「今の雄二にそんな人はいないし、いても私は諦めない」そ、そうなんだ…」

余程坂本にご執心のようだ（苦笑）

「…霧島、そこまで坂本を想っているなら、後々後悔しないよう、徹底的にアタックするといい。俺も応援しよう」

「私も応援するよ！」

「私も出来る限り協力するわ、霧島さん」

「私もよ。だから頑張りなさい、代表！」

「…うん、頑張る」

四人揃って霧島の恋を応援すると宣言して解散となり、各々の席に

戻る。

それにしても、

（応援…か）

中学時代、それも最初の頃だったら考えもつかなかっただろうな。母さんの親父との離婚、それに伴う引越等で慌ただしいまま中学へ進学と、当時の俺が置かれた環境は目まぐるしく変わっていた。元々人付き合いが苦手な事もあった為、一人で過ごす時間が殆どとなり、いつしか「何事も一人でこなせるように、一人でも生きていけるように」と考えるようになっていた。

今俺が親友と呼べるあいつら、そして俺の恋人リノア…

もし会わなかったら、未だに「人は一人では生きていけない」という当たり前の事実ですら気付かなかっただろうし、愛情の尊さも言うまでもないだろう。

こう言う自慢だとか押しつけたとか言われそうだが、恋愛の尊さを知っているが故、霧島の坂本への想いに共感出来たのかもな。

（紫宮や紅月にもこの話をしたら食い付くだろうか…む？）

ふと、文月学園に入学して以来、成績面で競い合っていた我がライバルとその恋人の顔を浮かべた時だった。

『他に勝てる切り札を用意していると思う』

霧島のそんな言葉を思い出したのは。

（見かけないとは思っていたが、まさか二人も……待て、そしたらあいつも…？）

S i d e サイファー

「サイファー、聞いたもんよ。何でも、FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けたとか？」

「おう、そうみたいだ」

「随分唐突」

俺は今、フウとライを俺の席——Bクラスの標準設備である、オフイスとかで見かける事務机だ——に集めて談話している。
話題はFクラスとDクラスの試召戦争について。

「F組代表思惑…戦力誇示？或他策有？」

「いや、前者はありえないもんよ。あの三人の力は知られているからそれを誇示したいのは分かるもんよ。だけどそれにしても初日に仕掛けるといのはいくらなんでも非現実的過ぎるもんよ」

「そうだな。仮にそう言いだしたとしてもあの三人なら絶対諫めるだろうし」

だとしたら何か勝てる策を思いついたからだろうが…にしても切り札がああ三人のみ（流石にああ三人や俺達のようなケースは皆無だろ。体調管理も重要だ）ではリスクが大きすぎる。

まあ、個人的にはFに勝ってもらいたいけどな。

Dにもゼルとかがいるが、Fにはセルフイ達の他に明久つつう大事な弟分がいるし。

P i r r i r r i r r i …

「お、電話だ…西村先生か」

「今一応授業中…呼出何？」

P i

「もしもし…あいよ分かった」

P i

「何の用件だったもんよ？」

「補習室からの脱走を食い止めるために監視しとけてさ」

「それ職権濫用だと思っもんよ…」

「まあ、仕方無えさ。自分で『観察処分者』同等の役割を志願したんだし」

「サイファー…」

「お？何だ、フウ」

補習室へ向かうべく席を立つと、フウに右手を引かれながら呼び止められた。

何なんだ急に、と思っていたら、

チュッ

唐突に俺の唇に感じたフウの唇の感覚。

つまりキスだ。

そして、

「…頑張（照）」

「…おう」

「相変わらずお熱いもんよ（笑）」

「ライ、茶化禁止」

げしっ

「あだっ!？」

フウからの見送りと、ライとの相変わらずのやりとりを横目に、俺は補習室へと向かう。

…相変わらず、フウは可愛いじゃねえか。

彼女の嬉しそうだったり照れていたといった表情を見るたび、俺のあの時の志願は間違っていないかったと思える。
さて、仕事しますか。

幕間　　獅子と狂犬とトトカルチョ！（後書き）

まさかの幕間です（汗

『天才と色ボケと下克上』を書くにあたって、主人公である王牙を主軸としながらもスコールや明久達といった彼を取り巻く面々にもスポットライトをなるべく当てられるように意識しながらの執筆ですが、如何でしょうか？

…なにぶん初めての取り組み（『GOD EATER AIGHT H』は新夜とスコールのダブル主人公なのでノーカウント（笑））なので『このキャラ全然取り上げられて無いじゃないか！』等の批判が噴出しそうな出来ですが、それら含めて感想等で書いて頂けると今後の励みになります。

八章 血飛沫と魔法と総力戦（前書き）

問

『武士道』が代表作として知られ、五千円札にも描かれた倫理哲学者を答えなさい。

アーヴアイン・キニアス、紅月姫香、紫宮王牙、島田美波、セルフ・テイルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え
『新渡戸稲造』

教師のコメント

正解です。他にも国際連盟の初代事務次長に就いた事でも知られています。それにしても島田さんまで正解とは驚きです。ドイツでも有名なのでしょうか？

坂本雄二の答え

『樋口一葉』

教師のコメント

それは今の五千円札の人です。

吉井明久の答え

『夏目漱石』

教師のコメント

それは千円札の人です。

八章 血飛沫と魔法と総力戦

Side シュウ

…期待以上の働きだったわね、土屋君。

代表である坂本君の要請で前線の少し後ろに待機するついでにその戦闘の光景を見ていたけど、こっちが押したと言えるんじゃないかしら、これは。

何しろ、

こちらの戦死者、土屋君含めて8名。

一方のDクラスの戦死者、11名。

さらに、向こうの代表であるゼルの保健体育を封じることにも成功した。

木下君の部隊や吉井君の部隊の情報はたまかなのしか入って来てないが、彼らも4、5人位討ち取ったらしい（その1・5倍の人数が討ち取られたようだけど）。

セルフィ達がおらず、私もまだ前線に入っていないことを考えれば僥幸ね。

あ、Dクラスの前線部隊の後ろから何人か増援が来たわね。

それに、古典担当の神来先生も連れている。

ベストタイミング、ね。

「神来先生、Dクラスのシオン・アトラティカが目前のFクラス全員に戦闘を仕掛けます！科目は古典——」

「Fクラスのシュウ・フェイオンがその戦闘を受けます！試獣召喚^{サモン}よ！」

「シュ、シュウさん！？つく、試獣召喚^{サモン}！」

『援護する！試獣召喚！』
サモン

古典

Fクラス

シュウ・フェイオン 407点

他5人 平均79点

V S

Dクラス

シオン・アトラティカ 496点

他10人 平均102点

さ、流石にシオンね。

私の1・2倍の点数を取っているなんて。

援護に回っているDクラスメンバーも、こっちのそれより質でも量でも上回っている。

これは出し惜しみは禁物ね。

「ブラッドペイン！」

思考は一瞬、直ぐ様腕輪の能力を発動させ、同時に私の召喚獣——
両手にそれぞれ苦無を装備し、ちよつと装飾過多な軍服を着ている
——が、シオンの召喚獣——黒基調のセーラー服を身に纏い、右手
にはハードカバーの本（やけに分厚い）を持っている——目がけて、
持っていた苦無を投げつける。

「！？」

予想もしない動きに一瞬たじろいだ様子も、それでも咄嗟に持って

いたハードカバーの本で防いだためにダメージは無かったけど、これはフェイクよ。

ヒュンヒュン！

ドスツドスツ！

「きゃあ！」

「ぐあ！」

Dクラス

玉野美紀

D E A D

冴島大河

D E A D

次の瞬間、援護に回ったDクラスのメンバー二人の召喚獣に苦無が刺さる。

一見何という事は無い光景だけど、

その苦無の出所が分からず、何時の間にか両手に持っていたとしか言えない

となれば相手にとって話は違っわね、きつと。

そう、これが私の召喚獣の腕輪『ブラッドペイン』の能力。少しばかりの点数を犠牲に新たな苦無を作り出す能力。といってもこの苦無、只の苦無では無い。

そもそも、召喚獣の普通の攻撃で人が痛がつたりしない。

『観察処分者』である吉井君や、ほぼ同等の立場であるサイファーは、召喚獣が受けたダメージの数%は返ってくる仕様だけど、これ

はあくまで『受ける』のであって『与える』訳ではない。

その前提を覆すのが、ブラッドペインの能力。

これで作られた苦無で受けたダメージの数%（『観察処分者』のそれよりは軽い……らしい）が召喚者に痛覚のみ返ってくるそうだ。

さらに、

ヒュン！

ドズッ！

「ぐあっ！」

Dクラス

小川政次 45点

今のは手元が狂ったみたいね。

ブラッドペインで作り出された苦無のもう一つの仕様、『必殺判定』。

基本的に召喚獣の能力は、その時の点数に比例するけど、どの召喚獣にも必ず『急所』と呼べる場所がある。

そして『必殺判定』は、急所に刺さった場合即座に戦死させる事が出来るという訳。

まあ某主人公がほぼ絶対喋らないRPGで表現するなら、ブラッドペインで造った苦無は『毒針』ね。

急所じゃ無くて、今みたいにダメージは大きいけどね。

「くっ、フレア！」

あら、向こうが反撃を始めたみたい…って！

ひよい

ちゅどーん！

…よし、状況判断。

私の見間違いないじゃなかったら、今明らかに青白い球体が私目がけて突っ込んで来たわね（汗

そして避けたはいいけど、標的を失った球体は地面に激突したと同時に爆発。
よって、

Fクラス

シュウ・フエイオン 347点

福村溝平 74点

…前線部隊、私入れてあと二人。

「…何あれ」

「いやいや俺に聞かれても！？」

「隙あります！メルトン！」

「級友ガード！」

「ちよっ！？」

ずどおおおん

Fクラス

福村溝平 DEAD

福村君、貴方の事は忘れないわ、多分「ちよつ多分て!？」それにしても本が光ったと思ったら、今オレンジ色の彗星みたいな物体が左手から飛んできたわね。

何処の魔界の王様目指してる魔物の子よ…

「一気に切り開きます!バー!させないわ(ヒュン)!」くっ!」

このままじゃまずい…

前線を突破されるのも時間の問題かしら…

その考えが頭を過った時だった。

「シュウ!援護するで!試獣召喚や!」
サモン

Fクラス

セルフィ・テイルミット 331点

待ちに待ったエースの一角が、私の親友がやって来たのは。

「セ、セルフィさん!?来てしまいましたか…」

「セルフィ…ジャストタイミングね…」

「へへん、真打ちの登場や!」

「おっと、僕を忘れちゃ困るよ」

そしてその後ろには、高い身長と優男な風貌の私の親友が、物理の白河先生を連れて立っていた。

「アーヴァインまで来ちまいやがったか!」

「白河先生、Fクラスのアーヴァイン・キニアスが、この場にいるDクラス全員に戦闘を」Dクラスのニード・レスファが受けて立つ

！科目は物理！試獣召喚（サモン！）」「やれやれ、試獣^{サモン}召喚！」

物理

Fクラス

アーヴァイン・キニアス 497点

V S

Dクラス

ニード・レスファ 417点

さあ、ここが山場ね！

八章 血飛沫と魔法と総力戦（後書き）

…えー、今後の執筆活動についてですが、就職活動及び卒業研究等のため、今後しばらくの間はこの『天才と色ボケと下克上』一本に絞らせていただきます。

『GOD EATER AIGHTH』シリーズ等の続きを期待していた皆様、申し訳ありません。

九章 氷河期とハッピートリガーとケツチャコ（前書き）

問

次の英文に返答すると共に、日本語に訳して下さい。

『You see?』

アーヴアイン・キニアス、木下秀吉、紅月姫香、紫宮王牙、島田美波、セルフィ・テイルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『返答：I see.』

訳：解りましたか？／ええ、解りました』

先生のコメント

正解です。サービス問題とはいえ、これは簡単過ぎましたか？

坂本雄二の答え

『訳：ヴァガッテンノガヨ！／ムセテンナヨ！』

先生のコメント

オイヨイ語に訳さないで下さい。

吉井明久の答え

『訳：会ったつけ？／ええ』

先生のコメント

誰が直訳しなさいと。

土屋康太の答え

『訳：●■』

先生のコメント

日本語に訳して下さい。

九章 氷河期とハッピートリガーとケツチャコ

Side 秀吉

「おつ、丁度良い頃に来れたの」

わしらの部隊が明久達の部隊と合流、再編成（具体的に言えば、点数的に危ない面子は回復試験に向かわせたのじゃ）を経て前線に向かうと、今まさに戦闘に参加したばかりのティルミットとキニアス、そして油断無く構えるフェイオンの三人が、Dクラスの面々と睨み合いをしておった。

しかし三人以外にFクラスの仲間は見当たらず。

ムツツリーニが大分叩いてくれたとは言え、流星は格上といった所かの。

もっともわしらの役目はティルミットとキニアスが合流するまでの時間稼ぎ。

二人が今この渡り廊下で戦闘体制に入っていることはわしらの役目が達成されたこと、わしらFクラスの作戦が思い通りに進行していることと同義。

Dクラス代表であるゼル・ディンの保健体育を封じ込めた事、戦死者が双方ほぼ同数という事（どっちもムツツリーニの功績じゃが）を考えれば想定以上じゃな。

ムツツリーニ…お主の獅子奮迅の活躍、わしらは忘れぬぞ。

「島田はキニアスの援護をたのむぞい！わしらはティルミット達の援護に向かう！」

「分かったわ！木下！」

「キニアス、レスファの足止めは頼むぞい！」

「了解したよ！」

「うむ！では皆、行こうかの！」

『了解！』

「皆、背中^{サモン}は頼むで！」

「ここが正念場、超頑張るのよ！」

『勿論！』

待っておれ王牙、わしらはお主の足元にも及ばぬ者ばかりじゃが、それでも必ずや吉報を届けようぞ！

「Fクラス木下秀吉、そこにいるDクラスメンバー全員に戦闘を仕掛ける！試獣召喚！^{サモン}！」

『俺達も援護する！試獣召喚！^{サモン}！』

「Fクラス島田美波、Dクラスのニード・レスファに戦闘を仕掛けます！試獣召喚！^{サモン}！」

古文

Fクラス

木下秀吉 96点

吉井明久 63点

他12名 平均79点

物理

Fクラス

島田美波 67点

さあ、最終段階じゃ！

S i d e ゼル

…何故こうなった。

始業式の日というあまりにも早い時期にFクラスからの宣戦を受けて始まった今回の試召戦争。

俺の（いや俺達か）出来の良い親友が三人もいると言う事もあつてか、たかが最低クラスと侮る事無くしつかりと作戦を立てて臨んだ筈だった。

だが現実はどうだ。

俺の保健体育で押し込む当初の流れは土屋という、俺達が失念していたピースによって頓座、しばらく出られないと思っていたシユウは、国語系科目だけ点を取っていた事もあつて土屋の後を継いで前線に立ち塞がっている。

そして、アーヴァインとセルフイの合流という、想定出来る最悪の事態を迎えてしまった。

本当に、なんでこうなっちまったんだろうな…。

「冷徹なる一撃！」

「デスペラード！」

パキヤアアアアアン！

ズガガガガガガガ！

「あばばばばば！？」

「うおつと！？」

『何で俺達まで！？』

…いけね、何を弱気になつてんだ、俺？

まだ戦いは終わっていないえ。

いくらあの三人がいるからって、まだこっちにはシオンもニーダもいる。

実際今の所、二人の得意科目が選ばれているという事もあって戦況はこちらが押し気味だ。

そして、二人の腕輪が発動し、宙を舞う召喚獣共。

…でもさシオン、味方迄巻き込むのは少しヤバくないか？

というのは、二人の腕輪の能力は俺とは違い『全体攻撃』だからだ。問題なのは、その全体が味方も含まれる、という訳で。

…目前には、シオンの腕輪の能力によって発生した氷塊が、味方の召喚獣もろとも撃ち抜く光景が広がっていた。

「おいシオン、味方が多数いる状況で撃つなよ！」

「あわわ！ご、御免なさい！」

ニーダの叱責が飛ぶ。

そのニーダの方は他に味方がいなかった事もあって、上空からばらまいた銃弾は全て敵に牙をむいたが。

…本当に、大丈夫かこれで。

そんな時だった。

「あれ、あんた、姫路瑞希じゃねえか？どうしたんだ、こんな所で？」

文月学園でも五指に入ると言われている才女、姫路瑞希の姿があっ

た。

…何でまたこんな所に？

ここは今、FクラスとDクラスの試召戦争の主戦場である。
関係者でも無いかぎり普通は近づかない筈だ。

「あ、あの…Fクラス姫路瑞希が、Dクラスのディン君に戦闘を仕
掛けます…科目は現代国語で」

「は、はあ…そっか」

ああ、Fクラス所属だった訳か。

それなら関係者だしここにいても不思議は無いよな…って！

「えっと…試^{サモン}獣召喚です」

「え！？ちょ、マジで！？」

いやいやちよつと待て、え、本当にFクラス！？

熱出した影響で途中退室した結果、無得点になったって噂は本当だ
ったのかよ！？

ってあれこれ考えてる暇ねえじゃん！

「くつ、試^{サモン}獣召喚だ！」

こうなりやヤケクソだ！

現代国語

Fクラス

姫路瑞希 384点

V S

Dクラス

ゼル・デイン 109点

「御免なさい！」

スパッ

結局斬られちゃったよ、呆気無くな。

十章 終戦と戦後処理と気になる関係（前書き）

問

以下の英文を和訳しなさい。

『Did you really betray us?』

アーヴァイン・キニアス、紅月姫香、紫宮王牙、セルフィ・テイル
ミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『本当に裏切ったのですか』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『本当に私達のベットに入っただんですか!?!』

教師のコメント

betray「ベットインではありません。

坂本雄二の答え

『オンドウルラギッタンディスカー!ダディアーナザアン!』

教師のコメント

ナニテンディスカ?ダディアーナザアンハイナイディスヨ...はっ
!?

十章 終戦と戦後処理と気になる関係

Side 雄二

Dクラス代表 ゼル・デイン 戦死

その勝利を知らせる一報と同時に、

『うおおおおお！』

『なん…だと…』

Fクラスの連中の勝鬨とDクラスの連中の絶望が辺りを支配した。

「凄えよ！本当にDクラスに勝利するなんて！」

「これで痛んだ畳やボロい卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ！あれはDクラスの連中の物になるからな！」

「坂本雄二様々だな！」

「やっぱり凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん結婚して！」

「秀吉愛してる！」

「フェイオンさん格好良い！」

「テイルミットさん好きだ！何か言った？（ズドン！）」「ちゅべえ！」

「やりましたぞ女王陛下！」

「御妃様！どうぞこちらへ！」

そして響き渡る俺への称賛。

何か…照れるな。

後半辺り完全に告白だるとか誰だ陛下に妃って（何となく予想はつくが）、とか普段なら色々突っ込みを入れたくなる状況も気にならなかった。

それだけ、このまるで英雄みたいに扱う歓声がくすぐったかったと言うか、心地良かったと言うか…

「あー、まあ、何だ…そう手放しで褒められると、何っーか…」

気恥ずかしさの余り思わず頬を掻いて明後日の方向へ顔を向けちゃう。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

それでも尚続くこの称賛の嵐。

まあ、それもそうか。

あんな設備、不満が出ない方がおかしいのだ。

畳は一部腐っているし。

隙間風は吹いてるし。

蜘蛛の巣張ってるし。

座布団は力チ力チだし。

卓袱台ボロいし。

おっといけねえ。

試召戦争は終わった後の対談が肝心だ。

この対応如何で、俺たちの今後が決まると言っても過言じゃねえ。

「アーヴァインやセルフイ、シュウだけじゃなく、まさか土屋に姫路までいたなんてな…今年のFクラス、どんだけイレギュラーなん

だよ…」

ふとそんな声が聞こえてきたので振り向くと、ジャストタイミングと言っべきか、そう思い立った俺にDクラス代表のゼル・ディンが歩み寄ってきた。

「あ、あの…御免なさい…」

「待て待て、何で姫路が謝るんだよ？あの三人さえ出させなければ楽勝だと甘く見てた俺達だよ、悪いのは。ぶっちゃけ…姫路が出てくる前から、負けるかなとは薄々思ってたし」

む、意外だな…。

確かにディンの保健体育を潰す為に康太を当て、アトラティカが出る事を見越してフェイオンに足止めを任せた結果、こちらの作戦通りキニアスとティルミットが合流するのに成功はした。

だが、まだアトラティカの国語系科目は圧倒してた訳だし、そもそも人数的には向こうが若干優勢。

その状況で敗戦を覚悟してたとは、

「…聞いてた通りのチキン野郎って訳か」

「誰がチキンだ！？ってかそれ言ってたの誰だ！」

「アルマシーが明久に言い触らしてたのを又聞きした」

「あの野郎！後で覚えてろ！」

おっと、心の声がつい出たか。

まあいいや、わざとだし（笑）

「いけね、戦後対談だったな。ルール通り、施設は明け渡す。ただ今日はもう遅えし、作業は明日でいいか？」

「いや、その必要は無い」

「は？」

「へ？」

俺の一言にデインだけで無く、一部を除いた両クラス全員の目が点になる。

まあ、そりゃそうだろうな。

だが、俺達の最終目標はAクラス撃破。

ここでルール通りに設備交換を行えばDの設備に満足しちまう輩も出、今後に影響が出かねない。

それにDクラスには代表のデインら、教科を絞ればAクラスにも十分対抗出来る实力を持つ奴が三人もいる。

Eは言わずもがな、Cクラスを牽制する為にもここで三カ月間、宣戦出来なくしてしまうのは惜しい。

それに、次はBクラスへの宣戦を予定している。

今回の戦争で皆に召喚獣の扱いに慣れさせると共に、紫宮と紅月の存在を隠蔽したまま本来の實力を発揮可能な状態にするだけでも儲け物だ。

まあ、それだけじゃねえが。

「こちらが出す条件が達成されればそっちの設備を貰うつもりは無い。交換はそれまで保留としたい」

「条件？何だ？」

「簡単だ。俺達は明日にでもBクラスに試召戦争を仕掛ける。そこでお前達にはBクラスのエアコンの室外機を、俺が合図したら使用不能にして欲しい」

「よし乗った！でもそんだけでいいのかよ？」

「ああ。まあ当然、設備を壊すんだし教師に睨まれると思うがな」
「構わねえよ」

「交渉成立だな。出来なかった時には…分かるよな？」

「もちろんだ。お前達もそう言うからにはBクラスに絶対勝てよな！」

「おう、期待してる」

交渉はこれで終了。

まあ、想定通りだな。

「お前達、今日はご苦労だったな！明日は補充試験を受けた後にBクラスに宣戦するぞ！今日はゆっくり休んで、疲れを癒してくれ！」
『了解！』

未だにDクラスに勝利した事が信じられない様子な奴、まだ俺達へ称賛の声をあげる奴、早くも明日への意気込みを固めてる奴と様々な反応をしている仲間達が、俺の呼び掛けと共に一斉に帰り支度を始める。

だが、

（三人足りないな）

そう、明久の姿を見かけてないと思い今数えてみたら、俺入れて四十七人しかいなかった。

ただ足りない三人のうち紫宮と紅月の二人は、存在を知られるとまずい事から先に帰るよう指示はしてある。

しかしあとの一人、つまり明久の姿も無いのはどうしたものか。

…先に帰っちゃったか？

明日のBクラス戦の宣戦布告の使者を色々理由付けて押しつけようと思ったんだが。

そこでふと、昼休み中に紫宮が明久を連れて何処かで話し込んでいたの思い出す。

紫宮は野暮用とか言っていたが、何だか妙だ。
その時は今回の試召戦争の件で有耶無耶になっちまったが、よく考えたらそれ以前にも結構話してたように思う。

（あいつ、明久にでも気があるのか？…いや、それはありえ無いか）

まずあいつは男（？）だし（胸が疑問だが）、それに紅月と付き合っている。

第一相手は『観察処分者』の明久である。^{バカ}
天地がひっくり返っても無いな。

（だとしても、やけに気に掛けていた様子だったな…ああ、気になつて仕様が無え）

家路につく俺の頭の中は、その事で一杯だった。

十一章 バカと恋愛と魔女の騎士（前書き）

問

原子の一つ、フッ素の単離に『完全に』成功し、ノーベル化学賞を受賞したフランスの化学者を答えなさい。

アーヴアイン・キニアス、紫宮王牙の答え

『アンリ・モアッサン』

教師のコメント

正解です。二人とも流石ですね。フッ素といえば歯の再石灰化を促す事から、今や歯磨き粉には欠かせなくなりました。

姫路瑞希の答え

『ハンフリー・デービー』

不正解です。デービーもフッ素の単離に挑戦しましたが失敗しました。流石に難しかったですね？

坂本雄二の答え

『フェルディナン・フレデリック・アンリ・モアッサン』

教師のコメント

…何故知ってる！？

十一章 バカと恋愛と魔女の騎士

「くしゅん！」

「どうしたの？風邪？」

「いや、誰かが変な噂でもしてるのでは無いか？」

「漫画じゃ無いんだから……」

回復試験の後坂本から早めに帰るよう指示されたボクと姫香。

その際、たまたま住んでいるマンションが同じだった（部屋は思いっきり離れているが）事が判明し、こうして吉井と共に下校する事にしたのだ。

まあ、それだけが理由では無いが。

「ところでだ、吉井」

「何？紫宮さ「だからボクは男だ！」く、君！？」

「はあ…吉井、いや明久。今度からボクの事は名前で呼べ。いちいち訂正するのは面倒だ」

「へ！？え、急に言われても！？」

「秀吉は既に名前で呼んでいるぞ？」

「え、そうなの？」

「そだよ…あ、吉井君…私の事も…名前でいいよ」

「う、うん。それじゃあ…王牙、姫香」

「それでいい、明久…さて本題に入るが、」

「ん？」

「姫路とはどこまで進展したんだ？」

「ぶっ！？」

何を吹き出しているんだ、コイツは？

そう、明久の恋愛相談の為に、こうして下校を共にしている。
校内だとあの黒装束共（FFF団というらしい）の妨害が入るだろうし、島田の魔王球やら坂本の誤情報やらが飛び交う危険は高いからな。

「いや、ちょ！？何急に!？」

「急も何も、さっきから何度か話していただろう」

「へ、あれ、そうだったっけ？」

「…はあ」

…やはりと言うべきか、コイツ、真性のバカだな。

「その溜め息についてはあえて聞かないけどさ、僕と姫路さんとはそんな関係じゃないからね！」

「つまり、姫路に対して特別な感情は持っていないと？」

「い、いや…持っていないと言われると否定するしか」

「つまり好きだという訳だな？」

「ストレートに言わないでくれる!？」

さっきから突っ込みのテンションが高いな、軽く引くぞ。

「そ、そりゃあ…まあ、好きだけど。可愛いし、優しいし、魅惑的な体付きだし、頭も良いしさ。でも僕みたいなバカ何か姫路さんには釣り合わないよ。それに意中の人もいるみたいだしさ…」

「…はあ」

全く、コイツはどこまで鈍感なのか。

まああんな珍解答をしでかす位のバカだ、それも致し方ないと考え
るしかないのだろうが…

「…吉井君」
「姫香？」

ふと、何時もとは違った声音で姫香が明久に話し掛けてきた。

「恋にそんなの…関係あるなら…私は今…王牙君の隣に…いられないよ…？」

「え？」

「自分で言うのも…変だけど…私見ての通り…巧く喋れないし…色々とトロいし…身体も弱いし…王牙君が…傍にいなかったら…人と関わる事も…出来ないし…欠点だらけだよ…？」
「えっと…」

何を言っているんだ、姫香？
欠点だらけ？
まさか。

「一方の…王牙君は…スポーツ万能だし…頭も冴えてるし…凄く格好良いし…偉そうに見えても…気配りが出来て…優しくて…完璧な人だよ…」

「う、うん」

「嬉しい事を言ってくれてはいないか、姫香」

「吉井君の…相手と…釣り合わないんじゃないか…その考えは…私も何となく…分かるよ…こんな欠点だらけの…私の隣に…完璧超人な…王牙君が…居る事が…信じられないって…たまに思う事が…あるから…」

「…」

「でもね、吉井君」

その後、姫香が発した言葉は恐らく明久に、あの決意をさせるに十分だったと共に、ボクの想いが正しかったと認識させるにも十分だった。

「王牙君が…傍に居てくれる事…それが…答えだよ…釣り合うとか…釣り合わないとか…そんなの後…今は…自分が…どう想っているか…相手に対して…どんな想いを…抱いているのか…それが一番…大事だと思うよ…」

S i d e 明久

王牙達に僕の恋愛相談に乗ってもらっていたら何時の間にかマンシヨンに到着、一先ず今日はお開きとなった。
それにしても、

「自分がどう想っているかが大事、か」

僕の第一印象通り、おとなしくて何かオドオドした様子のクラスメイトである姫香が、普段からは想像付かない位に気迫が込められた口調（喋り方は相変わらずだったけど）で発したその言葉。

僕と同じように彼女も欠点だらけと感じていたらしい（僕に言わせればそんな事無いけどね）だけに、強い説得力があった。

さて、僕の気持ちだ。

正直に言えば、姫路さんの事が好きだ。
試召戦争を始める様、雄二に進言したのも、彼女は然るべきクラスにいるべきだと考えたから。

…まあ雄二にはカマかけられた挙げ句にからかわれたし、王牙には

それをネタに煽られたりしたけど。
でも正直、姫香にああ言われる迄、面と向かって告白しようとは考えもつかなかった。

勉強は出来るし、可愛いし、優しいし、身体の弱さも保護欲をそそる（笑）し、魅力的な体躯だし。

正直言つて、僕には別次元の人だった。

だから…告白しても玉碎するだけだと半ば諦めにも似た思いを抱いていた。

姫香がああ言ってくれなければ僕は未来永劫、この想いを内に秘めたまま生きていたかも知れない。

それに、王牙と姫香、キニアス君にティルミットさん、サイファアにパラメディックさん、ゼルにアトラティカさん、レオンハート君にカーウェイさん（最後の二組はサイファアの話で聞いただけなんだけどね）…僕が見聞きしてきたカップルは皆一途に相手を恋慕っていて、そこに相手の想いを疑う様な雰囲気は微塵も無かった。中でも印象的だったのは、サイファア。

僕が一年の時の或る一件で『観察処分者』になったのと同時期に、自ら志願して観察処分者となった関係から、協力して雑用をこなしたり、話し込んだりした彼。

最初は余程の暇人かドMか或いはボランティア大好き人間かと、今思えば失礼な印象しか無かった。

その印象を彼は、ファーストコンタクトで発した一言で吹っ飛ばしてくれた。

「俺、フウを護る騎士になりてえんだ。その為なら雑用だって何だってこなしてやるさ」

それでも最初これを聞いた時は「リア充爆発しろ」とか思ったけど

（笑）、それも時が経つにつれ「彼みたいになりたい」という思いに変わっていった。

そしてその根底にあるのは、サイファアの恋人であるパラメディックさんへの一途な想い。

僕に将来、互いにそんな風に想える人が出てくるかどうか分からない。

もしかしたら縁が無いかも知れない、バカだし（笑）。

だけど今は、心に秘めた姫路さんへの想いを本人に向けて打ち明けるまで。

でも、

（何も、こんな慌ただしい状況じゃ無くてもいいよね）

今Fクラスは試召戦争ムード。

Dクラス戦には勝利したけど目標はあくまでAクラスだし、明日にはBクラス戦が待っているらしい（と言うのも、王牙が可能性をさりと指摘していたから）。

今は、試召戦争の事に集中しよう。

十二章 決意と化学兵器と何この混沌（カオス）（前書き）

問

年号が平成になってからの最初の内閣総理大臣を答えなさい。

紅月姫香、紫宮王牙、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『竹下登』

教師のコメント

正解です。ちなみに歌手のDAIGOさんのお祖父さんとしても有名です。

アーヴアイン・キニアス、土屋康太の答え

『宇野宗佑』

教師のコメント

確かに『年号が平成になってから初めて指名された内閣総理大臣』ですが、不正解です。

セルフイ・テイルミットの答え

『海部俊樹』

教師のコメント

宇野総理の次ですので不正解です。ちなみに作者もかつて同じような間違いをしました。

吉井明久の答え

『小泉純一郎』

教師のコメント

貴方にとって平成は21世紀になってからなのですか…？

十二章 決意と化学兵器と何この混沌（カオス）

キンコンカーンコン

「あー、終わった…」

「疲れた…」

「やっとお昼かの…」

Dクラスとの試召戦争で勝利してから一夜明けた今日、午前中の補充試験が終わり、突っ伏す明久達。
だらしがないな、これからBクラスと戦う（坂本も同じ考えの様だ）
という状況なのに。

「全く、先が思いやられるぞ」

「せや、ほんの三時間余り頭使っただけやろ」

「そうそう、これから嫌と言うほど頭使っんだし」

「そうね。特に坂本君、代表なんだからしっかりしなさい！」

「ファイトだよ…皆…」

『バカにはこれでも重労働なんだ』「あゝ？」「すいませんしたああああああ！」
『』

何か聞き捨てならない事を言おうとしたので黙らせておく。

「まあ、キニアス達の言い分も最もだな…さて、午後に向けてカレーとラーメンと餃子と炒飯とハンバーグでも食うか！」

「坂本君、それは幾ら何でも食い過ぎって奴だよ」

「と言うか、今日は姫路に弁当を作って貰う約束では無かったか？」

「あ、そうだった！」

…おい明久、坂本達もそうだが、忘れてどうする。

「そうだったわね。姫路さん、人数分大丈夫だった？」

「はい！腕に縫いを込めて作ってきました！」

「それは益々楽しみじゃの」

「…女子の手料理」

「ほんなら、昨日みたいに屋上にでも行こか？」

「そうだね、折角のお弁当だし、やっぱり広い所で食べたいね」

「それじゃあ先に行ってる。俺は弁当の礼も兼ねて飲み物でも買ってくるからな」

「そしたら坂本君、私も行くわ。こんな大人数分の飲み物、一人じや抱えきれないでしょ？」

「それじゃあ頼む、フェイオン」

「了解したわ。皆は先に食べててね」

「分かった。そしたらボク達は屋上に行くか」

「ん」

「はい」

「分かったよ」

「了解」

「せやな」

「そうじゃの」

「…（スッ）」

七者七様の返事を受けて、ボク達は屋上へ向かうことにした。
その途上、

「（明久、考えは固まったか？）」

「（うん、王牙。この試召戦争が終わったら、思いを打ち明ける事にしたよ。ありがとうね、王牙も、姫香も）」

「（ボクは特に何かした覚えは無いがな。まあ良い、悔いが残らないようにな）」

「（うん、分かった）」

明久に尋ねて見た。

…まだ躊躇している様なら鉄拳なり罵詈雑言でも浴びせてやるうかと思っただが、心配無い様だ。

流石に男だ、ああ言われて発奮しない方が異常だ。

良かったな姫路、お前の想いは、近い内に届くだろう。

…と、この時は姫路の料理の腕は特に気に留めていなかった（そもそもボクの分は味見する位だけで良いと言っておいた）故に、この後待っている無間地獄の如き惨状など予測出来なかったのが悔やまれる。

「はい、皆さんどうぞ」

パカッ

「「おおーっ！」」

「ふむ、中々の出来栄ではないか」

「へえ、綺麗な盛り付けだね。僕も少しばかり作ってもらった方が

「アービン？」アハハ、冗談だよセフィ（汗）」

「食べるの…勿体ないかも…」

姫路が何箱と用意した弁当箱を開けると、そこにはエビフライに揚げ、卵焼きにソーセージ等々…定番料理の数々が綺麗に並べられ

ていた。

個々の料理の出来も抜群の様で、写真を撮ればレシピ本に載せられるな、これは。

さて、（見た目からして旨いのは分かっているが）一応味見でもするか。

「本当に美味しそうだね！それじゃ、頂きm」

「さて、一口頂くぞ（ひよい）」

「あ、王牙ずるい！」

「明久の言う通りじゃ、王牙！第一お主はいらぬと言ったではないか！」

「ふん、味見する分だけと言っただけだし（パクッ）早いもの勝ちというー」

なんだこれは

口に入れた瞬間に舌で暴れだす訳の分からぬ味、さらに口内には本来は直接嗅いではいけないような匂い（いや、臭いか）が充満してきた…

つて、いかん…突然喋りを止めた事で皆が不穏な気配を感じ始めている…

ここは何とか良き方向に導かなければ…

「ひ…姫路…」

「はい、何でしょうか紫宮君？」

ま、まずい…意識しないと二の句が継げない…

「この唐揚げには…どんな…味付けを…したのだ…？」

「えっと、酸味付けとお肉を柔らかくする為に濃塩酸を入れたので

すが…お口に合いませんでしたか？」
『！？』

な ん だ と ！ ？

濃塩酸だと！？

本来は家庭科の授業では無く、化学の授業で用いるべき、あの濃塩酸だと！？

水素原子と塩素原子それぞれ一個を結合させた分子を溶かす事で作られた、硝酸と混ぜ合わせる事で金をも溶かす王水に変貌する、あの濃塩酸だと！？

…む、まずいな、今の姫路の爆弾発言で、周りに戦慄が走ったみたいだ…

姫香に至っては何か不穏なオーラを纏い始めている始末…

ここで姫路を傷付ける訳にもいかな…何としても取り繕わなければ…

「そ…そうだな…鳥肉が良い感じの…食感で…肉の旨味と…塩酸の酸味が…何とも言えぬハーモニーを…繰り広げ…」

だ、駄目だ…

「済まない…急にトイレに…行きたくなつた…皆の者…先に…堪能するが…良い…」

「あ、うん…」

テクテク

バタン

ダダダダダ！

「お、おい紫宮？」

「いきなりどうしたのかしら、紫宮君？」

あの…姫路が…料理に…濃塩酸を…使うとは…信じられん…姫路の…料理スキルは…一体…

ガチャッ！

「ウボアア———！」

そして、吐き戻して屋上へ戻ったは良いのだが、

「…（ピクピク）」

「御免なさい御免なさい御免なさい御免なさい…」

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

『（ガクガクブルブル）』

「…何なのだ…この混沌は…？」
カオス

よし、まずは状況確認。

恐らく姫路の料理を食したであろう坂本の遺体「まだ…死んでねえ…」「地の文に突っ込むな無礼者」に、何故かうわ言の様に謝り続けている姫路、何故かどす黒いオーラを纏って壊れたように笑い続ける姫香、そこから離れて震え続ける明久達六人、そして無残にも破壊され中身をぶちまけた姫路の弁当（化学兵器群）…

…ボクにこんな難問を出すとは無礼にも程があるのではないか？
という事で、

「明久、何があつた？」

明久に答えを尋ねる。

「お、王牙…有りの儘に起こつた事を全て話すよ！雄二が卵焼きを食べて倒れたら突然、姫香が姫路さんのドラマCDの方の人が演じたキャラっぽく変貌したんだ！何を言ってるのかさっぱり分かんないと思うけど、僕だってバカだから正直理解が追い付かないよ…オ。シロ様とかアン。マユとか、そんな物が可愛く見える、もっと恐ろしい姫香の（ry」

「ポル○レフか貴様は！？それに何だそのメタ発言の多さは！？」

ああ、こいつに聞いたのが間違いだつた！

こうなつたら今度は秀吉にでも…

「つまりね…王牙君…」

「ん？何だ姫香か」

突然声を掛けられて咄嗟に振り向くと、そこには姫香がいた。

が、何だろうか…何時もとは何か違う。

何となくだが、何も聞くなと言いたげなオーラを纏っている様な…

「吉井君が…言いたいのね…」

「明久が言いたい事とは？」

「乙女には…秘密が一杯って…事だよ…」

「…そうか」

成る程、所謂『乙女の秘密』という訳か。

可愛い事を言うではないか、姫香。

余談だが『そのまんま納得するの「ん？」「すいませんでしたあ！」、姫路は明久が正気に戻し、それ以後姫路が家庭科（無論料理の方だ）を真剣に学び直す事を決心したらしいが…大丈夫か？

十三章 宣戦と兄貴分と板挟み…でも無いか（前書き）

問

国民栄誉賞の初の受賞者を答えなさい。

アーヴアイン・キニアス、木下秀吉、紅月姫香、紫宮王牙、セルフ
イ・ティルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『王貞治』

教師のコメント

正解です。説明の必要はありませんよね？

土屋康太の答え

『手塚治虫』

教師のコメント

不正解です。それに意外と思われるでしょうが、受賞すらしていません。

吉井明久の答え

『なでしこジャパン』

教師のコメント

確かに『団体では』初です。

十三章 宣戦と兄貴分と板挟み…でも無いか

あの無間地獄の如き惨状から程なくFクラスへと戻り、他のクラスメートが集まったのを見計らって、次の試召戦争に向けてのミーティングが始まった。

「この後は昨日伝えた通り、Bクラスに試召戦争を仕掛ける。そして、『全うな形の』試召戦争は今回限りとする」
『えっ？』

そんな坂本の決定に、大半が驚愕する。
まあボク達、主戦力組はその訳を理解しているが。
なにせ、

「急に何で、雄二？」

「はつきり言うんだ、今の俺達にはAクラス撃破は無理だ」

今の戦力を考えれば、Aクラスとはまともに戦っても勝ち目は無いからだ。

流石のボクもそのような自惚れた考えなど無い。

『待て坂本、俺達には女王陛下が「誰が女王だ」貴方様に御座います、陛下「ボクは男だ！」』

「陛下って呼び名には突っ込まないんだね、紫宮君…」

コイツら、ボクの性別を何だと思っている…と、いかん、さっきの塩酸料理で少しイライラしてしまっている様だ。
落ち着け…精神を落ち着かせなければ…

「まあ確かにこっちは紫宮もいるし、姫路もフェイオンもいる。他にも教科を絞ればAクラス相手と言えども圧倒出来る輩はゴロゴロという」

だがな、と坂本は前置きし、その訳を伝える。

「だけどその紫宮と並び立つ天才、スコール・レオンハートがAクラスにいる。それに実質的に学年三位のキステイス・トゥリーブもいる。さらに驚きなのはこの二人が代表に就いていないという事だ。それは後々を気にせず前線に回れる事を意味している。只でさえ総合力では向こうが数段上なのに、切り札が十分に活用出来る事を考えると勝利は無理に等しい」

スコール・レオンハート。

ここ文月学園に入学してから今までずっと総合トップを争ってきた、ボクの友にしてライバル。

共通点の多さ（彼女が『文系』、モテる、あまり多人数が好きでは無い等）から普段は親しく話す仲ではあるが、いざ対決の場となると対抗心に火が付き、普段からは考え付かない程の集中力を発揮出来るようになる。

いつしかレオンハートの愛称『獅子』になぞらえたのか、その様子が『朱雀vs白虎』と銘打たれたりもした。

「だが俺達の最終目標はあくまでAクラスだ。そこで少し変わった対戦方式でAクラスに勝負を挑むつもりだが、その為にまずはBクラスを倒す必要がある、という訳だ」

…ほお、坂本は既にBクラス戦後をも見据えていたか。

流石に『神童』と呼ばれていただけの事はある。

Fクラスの代表に収まるには勿体ないな。

「さてそのBクラス戦での戦略の説明に入る。今回はキニアス・テイルミット・姫路・フェイオンの四人に前線に立ってもらう。紫宮と紅月は俺の護衛としてここで待機だ。回復したとは言えまだ存在を知られる訳には行かないからな」

「了解」

「分かったわ」

「任しとき！」

「はい！」

「うん」

「ふっ、任せておけ」

まあ、妥当な線だな。

「さて、Bクラスへの宣戦布告の使者だが…」

「それなら僕が行こうか？」

『え？』

坂本がBクラスへの宣戦布告の件を切り出しつつ、周りを見回し始めた時だった、明久が志願したのは。

「おいおい、良いのか？ま、言わなくても行かせるつもりだったが」

「今さらつと本音が出よったな、代表」

「…吉井君、何か変なものでも食べ、御免なさい御免なさい御免なさい…」姫路さん帰ってきて！」

「危ないよ…吉井君…せめてヘルメットを…持たないと…」

「…頭に釘でも刺さったのか？」

「皆して何げに酷いよ！そんなに宣戦布告の使者を志願しちゃ不自然！？」

…それはそうだろう。

「言っておくけど、Bクラス代表のサイファーとは仲良いから皆が想像してる事態にはならないからね、多分！」

「そうか、それなら行ってこい」

「了解！」

何はともあれ、明久自ら買って出た事で宣戦布告の使者（生贄）に悩まずに済んだ。

しかし…

「キニアス」

「何だい、紫宮君？」

「明久が言っていたBクラスの代表だが…サイファー・アルマシーの事か？」

「そうだよ。相当な高熱を押し振分け試験を受けた結果だって言ってたね、確か」

「そうか…あいつがBの代表か…」

サイファー・アルマシー。

総合で学年上位、特に国語と現代社会はボクに匹敵する点数を叩き出す学力もさる事ながら、自ら『観察処分者』同等の処遇を志願した事で『狂犬』というニックネームで知られている奴だ。

故に、只単に強いだけで無く『観察処分者』ならではの高い操作技術も兼ね揃えている…予想以上にてこずりそうだな、今回は。

「それだけじゃ無いわ、紫宮君」

「フェイオン？」

「Bクラスには他にもフウ、ライの二人もいるわ。ライはともかく、

フウについては紫宮君も目を付けていたでしょう?」

「何だと...?」

フウ・パラメディック。

失明している訳では無いのに眼帯を付けていたり、全て漢字で表記出来る口調で話したりといった独特のキャラもそうだが、ボクに迫る点数を叩きだす古文・日本史・世界史を始め学年上位の実力で知られている女子。

ちなみに上述したアルマシーの彼女で、彼が自ら観察処分者同等の扱いとなったのも彼女の存在が理由らしい。

フェイオンが他に挙げたライという生徒は知らないが、彼女が名を挙げたのだから相応の実力を持っているに違いない。

そうなるとBクラスには、学年上位の実力を誇る奴が三人もいる、という事になる。

ボクも本気を出さねばいかな。

S i d e 明久

ガラッ

「代表のサイファーいる?」

「おう、明久じゃねえか」

Bクラスの扉を開き、僕の親友（仕事仲間）の名を呼ぶと同時にその親友の、雄二をも上回る長軀が現れる。

「やあサイファー。ちょっといいかな？」

「おう、まあ座れや。フウ、ライ、お前達も入るか？」

「同席願。明久、良来」

「久しぶりだもんよ、明久」

サイファーが声を掛けると程無く、彼の恋人である眼帯が特徴的な『クールビューティー』という言葉が似合う風貌の女子と、

彼の親友だと言う良く日焼けした長身でゴツイ体格の男子がやってくる。

「久しぶりだね、パラメディックさんもイプシロン君も」

「明久、私フウ呼事」

「知り合いなのに名字で呼ぶのはちょっと堅っ苦しいもんよ」

…いや、そう言われてもサイファー程親しい訳でも無いし、急に馴々しくは出来ないから。

「それにしても、これがBクラスの設備か…A程じゃ無いにしても凄い設備だね」

「ああ、俺もびっくりした。一瞬、ここ学校だよな？とか考えちゃったぜ」

「私驚愕同」

「俺なんて未だに慣れないもんよ、正直」

そう、気軽に入ってみたけど、Bの設備も凄い。

今僕が腕を投げ出している机はオフィスで見かける事務机だし、除湿が効いているのか空気はさらさらで過ごしやすく、辺りを見回すと最新式のプロジェクター（スクリーン下から投影する奴らしい）

まである。

通常の三倍はあるらしい広さも加味すれば、ここは大手企業のオフィスみたいだね。

「まあそれはともかく、だ。昨日のDクラスとの試召戦争、よく頑張ったな。始業式にいきなり仕掛けた挙げ句、勝っちまうとはな」
「いや、僕は何もやってないよ。姫路さん達がいたから勝てた様な物だし」

「でも確か一つに分隊を率いて、自ら一人二人位か討ち取ったって聞いたもんよ」

「流石明久、サイファー期待通」

「まあFクラスでも最低ランクのお前でも活躍したんだ、胸張れよ」
「ははっ、そうかな」

それでも、キニアス君やティルミットさん、フェイオンさんにムツツリーニ、そして姫路さん……

その活躍に比べたら僕のそれなんて紙屑だ。

「で、本題に入るけど」

「おっと！」

「モガ!？」

今回Bクラスに來た目的を告げようとすると、突然サイファーが口を塞いできた……って、苦しい!塞ぎ方が力任せ過ぎる!

「……つぶはっ!い、いきなり何するのさサイファー!」

「(いいから声を抑えろよ、な)」

「(サイファー指示従)」

「(話はひとまず静かにしてからだもんよ)」

「（わ、分かった）」

今イチ納得いかないが、とりあえず指示に従って声を潜める。

「（で、ここに来たのは俺達Bクラスへの宣戦布告の使者で、だろ？）」

「（解ってたの！？）」

「（昨日Dに勝ったのに設備交換しなかったってゼル達から聞いたもんよ。そしたらもしかして更に上を目指してるのか？って容易に想像がつくもんよ）」

「（第一F組主戦力アーヴァイン、セルフイ、シュウ、姫路…勝機十分故、上位進出目指当然）」

ありやりや、気付かれてたか…

「（まあそれはいいが、ここは一応お前にとってはアウエーだからな。代表でありお前の顔馴染みである俺自ら対応してるからいいが、他の奴らが聞いてみる、フルボッコにされるぞ？）」

「（あ、そうだった）」

Dクラスへの宣戦布告の際にゼルが止めて事無きを得たからすっかり忘れてたよ。

「（で、いつ開戦する予定だもんよ）」

「（それじゃ、午後二時で）」

「（二時って…随分急だな、まあいいけどな）」

「（拳句今思付様…）」

「（そ、そんな事無いよ！）」

「（見え見えだ、全く。ともかく分かった、それじゃいい勝負しよ

うな！」

「（絶対負けないもんよ！）」

「（全力尽）」

「（こっちだって負けないから！それじゃあね）」

「（おうよ）」

ガタン

よし、一先ず用事は済ませた。

やっぱりサイファアと顔馴染みだったのが功を奏したみたいだ、無傷で乗り切れたよ。

さあ、Bクラス戦に向けて、気持ちを切り替えないとね！

余談だけど、僕がBクラスを離れて少し経ってから、後方で物凄いドタバタが聞こえてきた。

多分サイファアが宣戦の事を話したからだと思う。
本当、サイファアには世話になりっ放しだなあ。

十三章 宣戦と兄貴分と板挟み…でも無いか（後書き）

PV一万、ユニークアクセス二千突破しました！
皆様のご愛読、有難うございます！

今後も『天才と色ボケと下克上（略称募集します）』を宜しく願
いします！

十四章 波動砲とジャンプとBクラス戦開幕（前書き）

問

塩酸と水酸化ナトリウムを混合させると生成される物質と、それは何という反応によって生成されるか答えなさい。

アーヴアイン・キニ阿斯、紫宮王牙、セルフィ・ティルミット、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『物質：塩化ナトリウム

反応：中和』

教師のコメント

正解です。中和は、酸性の物質と塩基性（アルカリ性）の物質が混ざると起こる反応の総称です。

紅月姫香、土屋康太の答え

『物質：塩

反応：合体』

教師のコメント

土屋君は予想通りでしたが、紅月さんまで…

吉井明久の答え

『物質：ポーシヨン』

教師のコメント

FFですか。

十四章 波動砲とジャンプとBクラス戦開幕

Side アーヴアイン

キーンコーンカーンコーン

「皆行くよ！目指すはシステムデスクだ！」

『イエス！ボス！』

Bクラスとの試召戦争の開幕を告げるチャイム、それが鳴り響くと同時に廊下を駆け抜けるFクラスの前線部隊。

今回の作戦で重要と成るのはこの前線部隊による渡り廊下での戦い。クラスの2/3の人員に、僕にセフィ、シュウ、そして姫路さんを配備した事を考えればその重要性は解るだろう。

ここで上手く制圧し、Bクラスの面々を教室内に押し込めば、Dクラスとの協定も生きてくる。

その為にも、負ける訳には行かない。

隊長を任された身として、何としても完遂して見せる！

…っと少し焦り過ぎたかな、ふと背後を見ると、姫路さんが置いてけぼりになっていた。

各個撃破されては堪らないし、少し緩めないと。

「いたぞ！Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

…ちょっとタイミングがまずいかな、前方にはBクラスメンバーと思われる生徒の集団。

目測で25人位かな？

少なくとも20人は超えている筈だ。

しかも、

「アーヴァインとセルフイ、シュウと姫路には成るべく人数を掛けて当たるもんよ！人手が足りない様なら俺も出来るだけ援護するもんよ！」

『了解！』

恐らく前線部隊の隊長だろう、ライが指揮をしていた。相手も重要性を理解しているのだろう、クラスの半分の人員と切り札一人を使うとはね。

「長谷川先生！Fクラスのアーヴァイン・キニアスがBクラスメンバーに戦闘を仕掛けます！科目は数学で！」

「承認します！」

『キニアスだ！人員を回せ！試獣召喚！』

「試獣召喚！」

「アービン！ウチも援護するで！試獣召喚！」

「ちっ！そっちは任せるもんよ！高橋先生！Bクラスのライ・イプシロンがFクラスのシュウ・フェイオンに戦闘を仕掛けるもんよ！物理で！」

「承認します」

「Fクラスのシュウ・フェイオン、受けて立ちます！試獣召喚！」

数学

Fクラス

アーヴァイン・キニアス 504点

セルフイ・テイルミット 531点

島田美波 176点

木下秀吉 80点

他10人 平均77点

V S

Bクラス

15名 平均167点

物理

Fクラス

シュウ・フエイオン 399点

吉井明久 60点

他16名 平均70点

V S

Bクラス

ライ・イブシロン 413点

他9名 平均153点

「ちょ、おい！あの二人はともかく何だあの島田って奴！」

「Fクラスにはあんな隠し玉もいたのか！」

「怯むな！あの二人さえ何とかすれば恐れるものは何もない！」

僕とセフィだけで無く島田さんまで高い得点を叩きだした事に動揺の広がるBクラス陣営。

まあ、僕達も最初はびっくりしたよ。

失礼な話だけど、坂本君も始業式の日の決起の際に名前を挙げていなかったから、そこまでの戦力では無いと思っていたしね。

でも実際はAクラス入りしてもおかしくない知能を彼女は持ち合わ

せている…多分（吉井君達との対応を見てると何か疑わしいんだよね（苦笑））。

彼女曰く「ドイツから来日して一年しか経っていないから漢字が読めない」らしく、それで問題文が読めないものでこんな成績に甘んじているそうだ（数学がBクラス並みなのは、問題が数式で出される事が多いので影響が少ないからと本人は言ってた）。

僕やセフィ（それにスコール達親友）も、生まれは日本だけど両親共に外国人なので、少しでも難しい漢字は自分で調べるしか無いからそれは分かる。

…そんな彼女達、何より僕の失態に巻き込んでしまったセフィの為に、この試召戦争は絶対負けられない…！

「ハイパーショット！」

その掛け声と共に僕の召喚獣が、飛び掛かってくるBクラスの召喚獣へ向けて引き金を引いた。

そこまでは特に気に留める様な行為では無い。
勿論、

バシユウウウウウン！

ズガアアアアアン！

『んな！？』

僕の召喚獣が持っているスポーツライフルの様な外見の銃から、波動砲みたいな物が放たれる等想像もして無かったであろう。
結果、

「戦死者は補習うううう！」
『ウソダンドコードーン！』

Bクラスのメンバー数名が補習室に連行される。
そして、

「散り散りになってる今がチャンスだ！かかれえええ！」
『おおおおおお！』

それに伴いバラバラとなったBクラス陣営を急襲、各個撃破を繰り返す我がFクラスメンバー達。

…やりすぎたかな？

無論、ただ単に引き金を引いて波動砲なんて出る訳無い。
そこに、僕の召喚獣の腕輪が関わってくる。

腕輪の能力は『ショット』。

効果そのものは使用する弾種を切り替えるだけ（点数は要らない）だが、その切り替えられる弾種が強烈な効果を持っている。

今回使った『ハイパーショット』も、その一つ。

一発撃つごとに80点消費してしまうけれどそのパワー、攻撃範囲共に凄まじく、波動弾という表現はまさに正鵠を射ている。

今回の様な乱戦では最も力を発揮する弾種と言っているだろう。

「な、何て強さだ！」

「一発で数人葬るとかどんだけチートなんだよ！」

「アーヴァイン・キニアス…想像を絶する強さだ…！」

「イプシロン！こっちに人員回せられねえか！？」

与えた動揺は相当な物らしく、隣の物理フィールドで戦闘しているであろうライに援軍を求めてきた。
何気なくそつちを向くとそこには、

「飛竜昇！」

どごおおおおおん！

『あべしいいいい！』

『何で俺達まで！？』

…腕輪の能力を使ったであろう、空中から急降下した衝撃で敵味方関係なく（笑）数多の召喚獣を葬り去るライの姿。

そつちは今、ライ達が押している状況か…シュウと、少し前に合流を果たした姫路さんは、吉井君に引つ張られる形で回避に成功したから無事だけれども、厳しいな…。

「少し厳しいもんよ！こつちが押していると言ってもまだシュウと姫路が残っているもんよ」「セフィ、任せていいかな？」「了解やでアービン！ウチに任せとき！」「！？」

悪いけど、何が何でも勝たせて貰うから。

数学のフィールドの方はセフィに任せ、僕は物理のフィールドに移る。

向こうは既に壊滅に近い状態、セフィもいるし展開は変化しないだろう。

「待たせたね」

「中々の活躍じゃない、アーヴァイン」

「流石だね」

「このまま押し切りましょう」

「そうだね」「此処は俺が食い止めるから皆撤退するもんよ!」「っと」

僕が召喚しようとする Suddenly、ライが撤退の命令を出した。

しかも自ら殿の役目を志願しての。

だがその反応は、

「いやイプシロン!お前が撤退してくれ!」

「ここは俺達が時間を稼ぐから、お前はアルマシーの方に帰ってくれ!」

僕の予想の斜め上を行っていた。

この状況下でも逃げず、しかも先を見据えてリーダーを庇う…かなり人望を集めてなければこうは行かないね。

「皆…済まないもんよ!」

ライも、その想いを無下にしなかった。

即座に離脱し、若干名を引き連れてBクラスの方へと走っていく。

「皆、Bの前線はあと数人だ!このまま押し切るよ!」

『おう!』

「かかって来いや!」

「此処から先は通さねえぜ!」

結局、ライのいない前線部隊は時間稼ぎにしかならず、僕達の部隊は渡り廊下を制圧した。

ここまでこっちの被害は17人（大半が、ライの腕輪による被害だ
と思う）、向こうの被害は21人。

上々の戦績だね。

十五章 天才と初陣と不穏な気配（前書き）

問

『三国志』に登場する国、魏・呉・蜀の初代皇帝をそれぞれ答えなさい。

紅月姫香、紫宮王牙、姫路瑞希、シュウ・フェイオンの答え

『魏：曹丕子桓

呉：孫権仲謀

蜀：劉備玄德』

先生のコメント

正解です。曹丕は詩人としても知られており、『典論』等の多数の著書を残しました。

アーヴアイン・キニアス、セルフィ・ティルミットの答え

『魏：曹操孟徳』

教師のコメント

惜しいですが違います。ちなみに曹操と言えば最近、彼の墓が発見された事がニュースになりましたね。

吉井明久の答え

『呉：孫堅文台』

教師のコメント

いい加減ゲームと現実の区別を付けるように。

十五章 天才と初陣と不穏な気配

渡り廊下占拠から少し遡る。

「くっ！シエ。ミのエアスラッシュか…」

「ずっと私のターン、と行かせてもらいますよ」

「甘い！精神力カ○リユーにチェンジだ！」

「！マルチスケイル型全盛と思っていたら、まさかの精神力型ですか…」

「頑張つて…王牙君！」

「いやいやちよつと待てアンタら！何ポケ○ンやってんだ！そして福原先生！さりげなく中の人ネタが入ってる！」

「何を喚いている坂本。後メタ発言もいい加減にしておけ。軽く引くぞ」

「いや俺が言うのもあれだが、試召戦争中だとか言う前にここ学校だよな！？そして今一応授業中だよな！？」

「何を分かり切ったことを」

「そうですよ。それに試召戦争の話を持ち出すなら、私は紫宮さ…いえ、紫宮君でした、彼の依頼でここにいますよ？」

「ポケ○ンやりながら言う台詞じゃねえ！」

全くこいつは何を騒いでいるのか…戦争中だと言つのに緊張が足りないのではないか？

今ここFクラスの教室には、代表である坂本、護衛として待機しているボクと姫香、そしてボクが呼び出した教師福原の四人のみ。作戦上、無闇に外に出る訳には行かないので暇なボクは、ポケ○ンで時間を潰している。

で、何故か持っていた教師福原と現在対戦中、という訳だ。

しかし、アルマシーとパラメディックと相對する事になるであろう本拠地での戦いに入らない限りはボクの出番は無いだろう。

向こうは、最初から所属を認知していたキニアスにティルミットにフェイオン、あと昨日のDクラス戦で知られた姫路の存在を警戒して前線に多数の人員を掛けるだろうが、奇襲を警戒してそう多くは掛けられない筈だ。

こちらの得意科目（キニアス、ティルミット、島田が得意な数学）で押して行けば突破は難しくない。

正直、本拠決戦まで暇になりそうだ。

そう思っていた矢先だった。

「Fクラス代表の坂本か？」

「ああ、俺だが。一体何の用だ？」

「…む？」

壁越しに、何やら話し声が聞こえた。

その様子からして、坂本が誰かに話を持ちかけられたと考えるのが妥当か。

「Bクラス代表サイファー・アルマシーが協約を結びたいとのことだ。俺はその使者としてここに来た」

「協定…？概要は？」

「詳しくはアルマシーに聞いて欲しいが、一定のルールを定めた一時的な休戦協定だな」

「…分かった。案内してくれ」

…アルマシーが休戦協定を持ちかけてきた、だと？

「えと…止めなくて…いいの？ 罾かも…知れないよ？」

「いや、アルマシーの性格からして坂本を呼び出した事自体は信じ
ていいだろう」

「坂本君を呼び出した事自体は…ですか」

恐らく、休戦協定を結びたいというのは彼の本音であろう。

試召戦争のルールに、制限時間みたいな物を定めた条文は無い。

長引いた場合は放課後になろうが夕食時となろうが戦いは続く。

そんな状況ともなれば、クラス全体のモチベーションの低下は必至。
こつちの戦力を鑑みて長期戦は避けられないと踏んで協定提案を
行したのであろう。

それは、それ自体は信用出来る。

だが、

「だが、それに乗じて卑劣な手に乗り出す輩がいらないとは限らない」

「へ…？」

「？」

今回のBクラス戦が始まる前、土屋から一つの情報を耳にした。

根本恭二が、Bクラスに在席している。

学力自体はボクに遠く及ばないものの、その多種多様な権謀術数で
有名な男子、根本恭二。

その例を挙げだしたらきりが無い程の奴だ、今回の試召戦争でも仕
掛けてくる可能性は大。

もし奴が今、坂本が離れた事でFの教室には誰もいないと判断した
としたら…確実に、来る。

「教師福原」

「はい？」

「Fクラスの紫宮王牙が、今こちらに来ているBクラスの連中に戦鬪を仕掛ける。科目は…現代社会だ」

「こちらに来ている？…まあいいでしょう、承認します」

「姫香も入ってくれ」

「ん」

そう、ボクが教師福原を呼んだのはこの事態に備えて。

Bクラスは、ボクや姫香がFクラスに在席しているとは全く想定していない筈（その為にDクラス戦では傍観に徹した）。

その想定していなかった戦力が、がら空きになっていた筈の場所から出てきたとすれば…相手に与えるインパクトはかなりの物。

坂本がボクらに何の断りも無く離れたのも、それを考慮したのだから。

そして、

「な、何でこんな所に召喚フィールドが展開されているんだ！？」

「Fクラスの教室はもぬけの殻じゃ無かったのかよ！？」

それらは全て思い通りに進んだ。

「BINGO、だな」

「凄い…王牙君…」

「未だに信じられませんよ…紫宮君達のクラス担任だという事実」

さてボクの、いやボク達の初陣だ。

ガラッ！

「怯むな！見抜かれたとは言っても相手は所詮Fクラス！俺達Bクラスの敵では無…い…」

「誰が敵では無いと？その台詞は補習室送りというおまけを付けて返してやるう、無礼者共よ」

「殺っちゃうよ…」

「「試獣召喚！…！」」

その合図と共にボクの、黒いスーツを身に纏い、腰には鞘に納まった太刀、額には鉢巻きを巻いた召喚獣と、姫香の、白いドレスを身に纏い、頭には白い薔薇の髪飾りを付け、某夜の王が使う様な杖を構える召喚獣が姿を現す。

現代社会

Fクラス

紫宮王牙 573点

紅月姫香 617点

「紫宮王牙に、紅月姫香…！？」

「なん…だと…！？」

「嘘だろ…何でFクラスに…」

想定していなかった存在の登場に、動揺を隠せないBクラスメンバー。

「その皆さん、早く召喚しないと戦闘放棄とみなしますよ」

『！し、試獣召喚！』

Bクラス

10名 平均177点

教師福原の発言で慌てて召喚するが、焦りは命取りだぞ？

タッ！

「フッ！」

ズバァッ！

即座に敵の目前に接近して刀を抜き様に手近にいた一体の首を断ち、

ザシユウッ！

返す刀でもう一体を深々と袈裟斬りにし、

ドズッ！

さらに一体の首を串刺しにし、

ドシユウッ！

引き抜いた勢いで周囲を薙払って二体に深手を負わせた。

この間、僅か数秒。

精神的に優位だったとは言え、呆気ない物だ。

ふと辺りを見回せば、姫香もまた三体の召喚獣を倒した所。
腕輪を披露する機会はまた何処、か。

「何なんだよ…あの強さは…」

「今年のFクラスは一体どうなっているんだ…チートじゃねえか…」

呆然自失、といった感じの生き残り。

それはそうか。

点数に圧倒的な開きがあったとは言え、たった二人の相手に、僅か数秒で殆どの人員を討ち取られたのだから。

「終わりだ」

「デストロイ…（笑）」

ヒュン！

無論、何の抵抗も無しに討ち取られ、

「戦死者は補習うう！」

『ウエーイ…』

何処ぞやのオンドウル語を残して補習室へ連れていかれた。

「おい、今鉄人が物凄い勢いで走っていったが…何があった？」

程無く、アルマシーとの交渉を終えたであろう坂本が戻って来た。
随分とゆっくりな帰還だな、ボクの雄姿を見逃すとは。

「何、空き巣紛いの事をしようとしたBクラスの連中に裁きを下したまで」

「空き巣紛い…根本のヤローか…ご苦労だったな」

「ふっ、まるで手応えが無かったな。それより坂本、休戦協定の内容は？」

「おつとそうだったな。紫宮と紅月、その内容を教えた後に前線の皆にも伝えてくれ。」

その傍ら前線に回ってくれるか？」

「了解だ」

「ん」

さて、前線の方はどうなったか。

「ほう、想定通りとはいえここまで押し込むとはな。ボクの出る幕は無しか、これは」

「そうみたいだね…」

前線部隊が相当活躍した様で、Bクラスの教室目前にまで前線を進めていた。

協定は必要無かったのではないか？

「あ、王牙！」

「明久、随分と有利に進めている様だな」

「こんな所でどうしたのさ、というか雄二の護衛は？」

「その坂本からの伝言を預かっているから、一旦攻撃の手を緩める様伝えてくれ」

「伝言？うん、分かった。皆！王牙が何か話があるから一旦攻撃を中止してくれって！」

『お呼びでしょうか女王陛下！』

「速いなって誰が女王だ！ボクは男だから皇帝と呼ばぬか！」

「そりゃこの際ええやろ。それより代表の伝言って何や？」

そうだった、危うく我を忘れる所だった。

「皆の者、坂本がBクラス代表のサイファー・アルマシーと休戦協定を結んだらしい」

「休戦協定？」

「ああ。今日の四時までに決着が付かない場合は明日の九時から再開するとのことだ」

「何でまた急に？今現在押し込んでいるし、体力的にもこっちが上だし勿体ないんじゃないかい？」

「姫香と姫路以外は、だそうだ。それにボクも持久力には自信が無い。明日満を持してBクラスを倒すべき、というのが結んだ理由だ」

総合力で言えばボクと姫路は重要となる。

姫香、キニアス、テイルミット、フェイオンも教科によっては危ない事を踏まえると、ボクと姫路が万全の状態の方が確実だという結論に至ったらしい。

そして、協定で定められた四時が経過し、ボク達はFクラスに戻る事にした。

…だが何故だろうか、胸騒ぎがする。

正直、あの根本があれ位で終わる筈が無い。

他にも何か手を考えているのでは無いか…？

十六章 権謀術数と失踪と何かのフラグ（前書き）

問

国際連合の190番目の加盟国を答えなさい。

紅月姫香、紫宮王牙、姫路瑞希の答え

『スイス』

教師のコメント

正解です。ちなみに永世中立の観点から、国民投票で可決されるまで加盟申請しなかったそうですよ。

アーヴァイン・キニアス、セルフィ・ティルミットの答え

『セルビア』

シュウ・フェイオンの答え

『東ティモール』

教師のコメント

惜しい。どちらもスイスの前後に加盟した国です。

吉井明久の答え

『コクーン』

教師のコメント

中の人ネタは止めましょう。

十六章 権謀術数と失踪と何かのフラグ

「CクラスがFクラスとの戦争の準備をしている？」

ボク達前線部隊が教室に戻って少し後、教室に入ってきた土屋がもたらした情報。

ボクはそれに妙な引つ掛かりを覚えた。

何せ、

「やけに唐突だな。仮に宣戦したからと言って今現在はこちらに拒否権がある訳だし、何よりCクラスにメリットは無い筈だ」

そう、Cクラスの思惑通りに事が運ぶ可能性も、そもそもメリットも少ないからだ。

「そうだな。ただ仮に俺達がBに勝利したとなれば仕掛ける好機にはなる。それを見越した物だとしたら厄介だな…」

「漁夫の利を狙ってる、言う訳やな」

「僕達がFクラスにいるという事は既に周知の事実だしね」

それもそうだな…む？

「何にせよ、ここは一先ず不可侵条約でも結んでおかないとな。Dクラスを動かせるとしても脅しておけばおとなしくなるだろう」

「待て、坂本」

「ん、何だ紫宮？」

さっきから感じていた嫌な予感、その原因が何となく分かった。

「確かBクラスの根本はCクラス代表の小山と付き合っていると聞いているが」

「確かそうだったな。それがどうした？」

「…もしかしたら根本が裏でCクラスを手引きしているのかも知れない。権謀術数に長けた奴だ、さっきので終わる筈が無い」

「マジかよ…って事は恋人の立場を利用して協定のルールを掻い潜って接触している可能性もあるな…」

「せやな…そいでウチらがCクラスに来たのを見つけて協定違反とか言い掛かり付けんとも限らん…汚い奴や…」

「くっ…そうね。所で紫宮君、さっきのって、一体何の事？」

ああ、そういえば話していなかったな。

そう思い、ボクは先程Bクラスの連中が坂本の留守を狙おうとした一件を話した。

「！？」

「何ちゅう奴や、心底腐つとるわ！」

「セフィの言う通りだ！そんな真似を平然と…！」

「おまけに自分は高見の見物と洒落込んでいたみたいじゃない！外道と言うしか無いわ！」

「そうね、紫宮君がいなかったらと思うと腹立たしいわね！」

『そうだそうだ！』

『オレラハ根本ラムツコロス！』

ボクの報告で、一段と高まる根本への怒り。
そんな中、

「（どうした姫路、何やら冷や汗みたいなのが出ているが）」

「（し、紫宮君！？）」

何やら姫路の様子がおかしかったので声を掛けてみる。
案の定、慌てふためいたが。

「何かあったのか？ もしや、Bクラスの連中に何かされたのか？」

「

「（いえ、何かされたと言う訳では無いのですが、ただ…）」

「（ただ？ 何だ？）」

「（実は吉井君に出そうと思っている手紙を教室に置いたままにしています…もし取られたりしてしまっただらと思うと…）」

成る程な、確かに（恐らく明久へのラブレターだろう）そんな手紙をBクラスの連中に取られたりしたら心中穏やかではられない筈。そしてあの根本の事だ、これをダシに脅迫するに違いない。

「（そうか…取られずに済んで良かったな）」

「（はい…紫宮君も紅月さんも、有難うございました）」

姫路の安堵した様子に一先ずは安心しつつ、次の懸案の処理に掛かる。

「紫宮、どうする？ 仮にCクラスとBクラスが繋がっていたとして、協定を盾に奇襲する準備をしているとしてもだ。ここで動かなければ挟み撃ちだ。どの道行くしか無いんじゃないか？」

「…そうだな、行くか」

「せやな」

「そうだね」

「そうね」

「そうですね」

「…ん」

「よし、そうと決まれば紫宮やキニアス達主力組は付いてきてくれ。CやBの連中もAクラス上位並みの実力を持っているお前らには迂闊には手を出さないだろう」

こうして、ボク達九人

（ボク、姫香、坂本、キニアス、ティルミット、フェイオン、島田、姫路、明久）は不可侵条約を結ぶ為にCクラスへと向かった。だがこの時は、あの事件が後々に深い禍根を残す事になるうとは誰も想像していなかった筈だ。

S i d e サイファア

「お帰りだもんよ、サイファア」

「ああ只今つて、あれ？やけに少なえな？」

Fクラスと、条件付きの休戦協定を結んでBクラスの教室へ帰ってきた俺の目には、想像よりもメンバーが明らかに少ない教室が映った。

「前線部隊で大分戦死させちまった」め、面目無いもんよ…」ライ、過ぎた事だ、それは後々の糧にしてくれば良いが…それにしても少なくなえか？」

「変確。残人員何処？」

「確かに変だもんよ…：そういえば俺が戻ってきた時には既にこれ位だったもんよ」

ライが戻った頃には既に…か。

前線部隊での戦死数は21人という報告を受けているから、本来の過半数は此処に居て良い筈。

それが僅か数人である、明らかに減り過ぎじゃねえか。

それに、そういえば、

「根本の姿も無えな。あいつ何処行きやがった。明日の作戦会議しようと思ってたのに、全く」

今回の協定を提案して来た根本の姿すら無い。

これは一体どうした事だと思案に耽っていると、

「根本なら、さっき何人が連れてCクラスの方に行ったぞ」

俺達の話聞き付けたのか、一人の男子が情報提供してくれた。それにしても、Cクラスか。

確かあいつの彼女が代表を務めているクラスだったよな。

だが、何人が引き連れて、というのが少し引掛かるな。

彼女に会いたいならば一人で行けばいい物。

何人が引き連れてという事は、何か交渉事を持ってだろう。

しかし今はFクラスとの休戦協定の施行中、一切の戦争関連の行為が許されていない筈だ。

何よりこの協定を提案したのは他ならぬ根本だ。

何でまたそれを破るのではないかと言われかねない行動を…？

まあいい、とにかく、

「代表たる俺に黙ってこそこそ動くのは好ましくねえな」

「同意」

「あいつ腹黒いから何しでかすか分からないもんよ。ここらで一つ灸を据えるべきだもんよ」

そう思い至り、俺達はCクラスへと向かう。
この決断が、後々の禍根の真の切っ掛けになるとは露知らずに。

十七章 畏と騎士とフルボッコ（前書き）

注：今回は残酷な描写が満載です。苦手な方は即座に回れ右をお願いします。

十七章 農と騎士とフルボッコ

程なく、Cクラスの教室前まで辿り着いたボク達。

この物々しい雰囲気：やはり試召戦争を始めようとしているという土屋の話は本当だったか：

「そんじゃ行くぞ。皆、何かの時の為に心の準備だけはしておけ」

「了解したよ」

「せやな」

「分かったわ」

「はい」

「任せて」

「りょーかい」

「ん」

「勿論だ」

扉を開く前に、坂本が気を引き締める様注意を呼び掛ける。

場合によってはここから先は修羅場だ、臨戦態勢は整えて置くに限る。

ガラッ

「Fクラス代表の坂本雄二だ。Cクラスの代表はいるか？」

扉は開かれた。

直ぐに、このクラスの代表であろう小山の姿が現れる。

「私が代表の小山だけど…って、紫宮さ「何故どいつもこいつもボクの性別を間違えるのだ！」君!？」

…つと、いかな。

怒りで我を忘れて、向こうの動揺をスルーしてはいけない。

「随分物々しい雰囲気だな。試召戦争を始めようとしてたつて噂は本当だったか…おつと、襲おうとか考えるなよ？こっちはBクラスの中を短時間で過半数も葬った主戦力が揃っている。迂闊に手を出せば、待っているのは補習室という悪夢だ」

「…つまり、不可侵条約を結びたいという訳？」

「まあそういう事だ。理解が早くて助かる」

その動揺に畳み掛けるように、坂本が交渉という名の脅迫を始める。
…だが乗るか蹴飛ばすかは微妙だ。

少なくとも、ボクの予感が当たってしまえば乗ってくる可能性は…

「それで…どうかしら、根本君？」

「却下だ。必要無いだろう？」

やはり根本の手引きか…！！

小山が呼び掛けると、物陰から根本と、その連れらしい十名のBクラスメンバー、そして社会科教師田中の姿。

それを見た坂本はこっちにアイコンタクトを送ってきた。

「お前の予想通りの展開になっちまったな」と…

それに対しボクも「ここはボクに任せろ」と返す。

理解してくれたか、坂本は一步引いてくれた。

「根本、貴様の手勢が世話になったな。お陰で軽い準備運動になったぞ」

予想通りの、しかし通って欲しくなかった展開に心中で舌打ちしつつ、先の件を引き合いに牽制する。

「はっ、そいつはどうも。それにしても酷いじゃないか。試召戦争に関わる一切の行動を禁止したと、協定では定めたよなあ？」

「まるでそれを見抜いていたかのような人数だな。代表のアルマシ―が、良く許可を出した物だ」

「ふん！あんな夢見がちで甘っちょろい色ボケロマンチスト何かの許可なんて…！？」

ボクと根本の舌戦の最中だった、この場の気温が一気に十度も下がったように感じられたのは、さらに、

「へええええ、ほおおおお、ふうううん！そうか、そう言う事だったのか根本…！」

教室の外から聞こえた、落ち着いていながらも怒りに満ちた迫力ある声。

そして、

バァン！

「さあて、俺の疑問に答えてもらおうか、なあ根本…？」

「あ、アルマシ―！？」

「根本肅正…！」

「ボッコボコにしてやるもんよ…！」

乱暴に開け放たれた扉から、Bクラス代表のサイファー・アルマシ

ーが入ってきた…なにやら森羅万象を司る書となる前の魔神をかたどったオーラを纏い、その後ろにフウ・パラメディック（タタリに吸血鬼化された錬金術師のオーラ付き）、ライ・イプシロン（無類の強さを誇りながら三枚目ポジションな武人のオーラ付き）を引き連れて。

S i d e 明久

サイファーとは長い付き合いである僕も、今の様な形相は見たことが無い。

今の彼は、それ程までに怒り狂っているのか。

さらに後ろの二人もまた、物凄く怒っているのは明白だ。

表情や立ち振る舞いは普段と変わらない様に見えるが（いや、それだから尚更）、その怒りを表現したオーラ（何故中の人ネタなのか…）は丸見えだった。

何か良くない事が起こる…僕はそう直感したけど、身体が竦んで止められなかった。

「そっぴゃあ紫宮が、お前の手勢が世話になったとか言っていたなあ…教室に戻っても俺達数人しかいねえし、今ここにいる面子含めても勘定が合わねえんだよ…その辺、詳しく説明してくれねえかなあ？」

その剣幕に、言い逃れは通じないと直感したのだろう、僕達が王牙から聞いた話とそう変わらない事をサイファーに打ち明けた…王牙への悪態と共に。

「あいつがいたせいで計画は全てぐちゃぐちゃだ！大体何だつて紫宮みたいな天才様がこんなバカの吹き溜まりにいるんだ！紅月の看病で振り分け試験に来れなかったという噂は本当だったんだな！色ボケの余り一年丸ごと捨てた訳か！バカな奴…！？」

「成る程な。お前の言い分はよく分かった」

サイファアが静かにそう告げた、次の瞬間だった。

「よくも俺の顔の傷一本増やしてくれたな！」

バキィッ！

どんがらがっしやぁん！

「ガハアッ！？」

「うわぁあっ！？」

「きゃぁあっ！？」

冷徹とも言える笑みから一転、形容しがたい程の怒りの表情を見せたサイファアが放ったストレートパンチで根本が宙を舞い、Cクラスのス生徒や机を巻き込んで吹っ飛んだのは。

「あ…あんた一体なんなの！？勝手に人のクラスにずかずか入り込んだ挙げ句、人の彼氏を殴るなん…！？」

流石に我慢ならなかったのか、小山さんが物凄い剣幕でサイファアに詰め寄ったけど、それは、

ヒュン！

「煩！阿婆擦！」

パラメディックさ…ゲフンゲフン、フウが瞬時に放ったカッターナイフで止められた。

さらにフウは、懷から十数本ものカッターナイフを取り出し、

「不動、或切断…！」

と脅迫までする始末。

それにより、この後の惨劇を予想しつつも誰も止める事は出来なくなってしまうた。

僕達も…

「さあて根本、今のパンチ一発で済まされるとか思ってたねえだろう？前々からお前の事が気に食わなかったんだよなあ…こざかしいならまだしも、彼女の扱いはぞんざいみたいだし…覚悟、出来てるな…！」

「ひ、ひい…」

サイファアの私刑宣告と、根本の悲鳴。
それが、惨劇の開始合図だった。

「やっちまったなあ。血は落ちにくいのに」
「う…あ…」

地獄だった。

Cクラスの教室全体を、壁紙を貼り替えたかのようにペイントした根本の血、吹っ飛んだ際に巻き込まれて哀れスクラップとなった机

と椅子の数々、呻き声を上げる気力しか無くなってしまった瀕死の根本の体躯…それもまた、自らが吹き出した血に塗れていた。

呑気に洗濯物の心配をしている地獄の創始者であるサイファーもまた、返り血でワイシャツがずぶ濡れだった。

ついでに僕達も数人くらい血が付いた事を言っておく。

…何というか、これまで強い敵意しか持たなかった根本が、哀れに見えてきた（それでも根本への反感は消えなかった。自業自得だし）。

同時に、これからはサイファーを怒らせるのは絶対に止そうと思った。

「さて…悪かったな坂本、俺の監督が行き届かなかったばかりにお前らに濡れ衣を着せかけちまった挙げ句、俺の私刑に巻き込まれてな。見るに耐えなかっただろ…？」

「あ、ああ…」

数々の修羅場を潜った雄二も同じ思いだったのだろう、サイファーに声を掛けられて一瞬びつくりしたようだった。

「あいつが独断で仕組んだとは言え、この責任は代表たる俺にある。受けられる程度の処罰なら何でも受けるつもりだ。本当に済まん！」

そう言つて土下座するサイファー、その顔は私刑執行人としての顔では無い、代表としての顔だった。

「そしたら、だ。おまえらの残つてるメンバーの半数辺りを戦死扱いにしてくんねえか？」

「…それだけで良いのか？」

「ああ。元々俺もあいつの事が気に食わなかったし、今日の試召戦争でも色々やらかしてくれたみてえだしな。哀れには思うが、清々

した気分もある」

「分かった、坂本。そしたら…」

そうして、サイファーが選んだのは、

「今回根本に付き従った奴ら全員でどうだ？勿論根本含めてだ」

『んなつ！？』

「ああ。むしろこっちからもそれで頼む」

「交渉成立、だな」

『ま、待て！』

ガラッ！

「戦死者は補習うう！」

『嫌だあああああ！』

…こうして、根本に付き従っていたBクラスメンバーは連れて行かれた。

それにしても、敗北の可能性を大きく上げるような条件を「それだけ」で済ませるサイファーは凄い。

流石に今のような事は褒められた事じゃ無いけど、やっぱりBクラス代表として今回の事で責任を感じていたのだろう。

改めて、サイファーの想いの大きさを感じた…良くも悪くも。

その後、瀕死となっていた根本だけど、出血多量でふらつきながらも何故か再起していた。

ご都合主義も大概にして欲しい。

それでも、事態を重く見た学園側は緊急で教職員会議を開いたけど、秘密主義を貫く学園長の意向で根本の重傷は屋上から誤って転落し

た事による物と事実を捻曲げて公表、サイファーは正式に観察処分者となるだけで済んだ。

これが、後の重大な遺恨に繋がるなんて、今の僕達はそこまで考えも付かなかつたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2836u/>

天才と色ボケと下克上

2011年10月17日05時55分発行